

41807

教科書文庫

4
8/0
41-1930
200030
1999

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

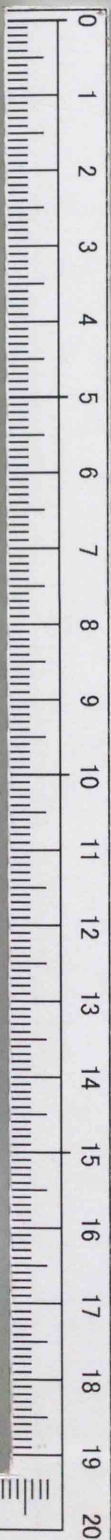
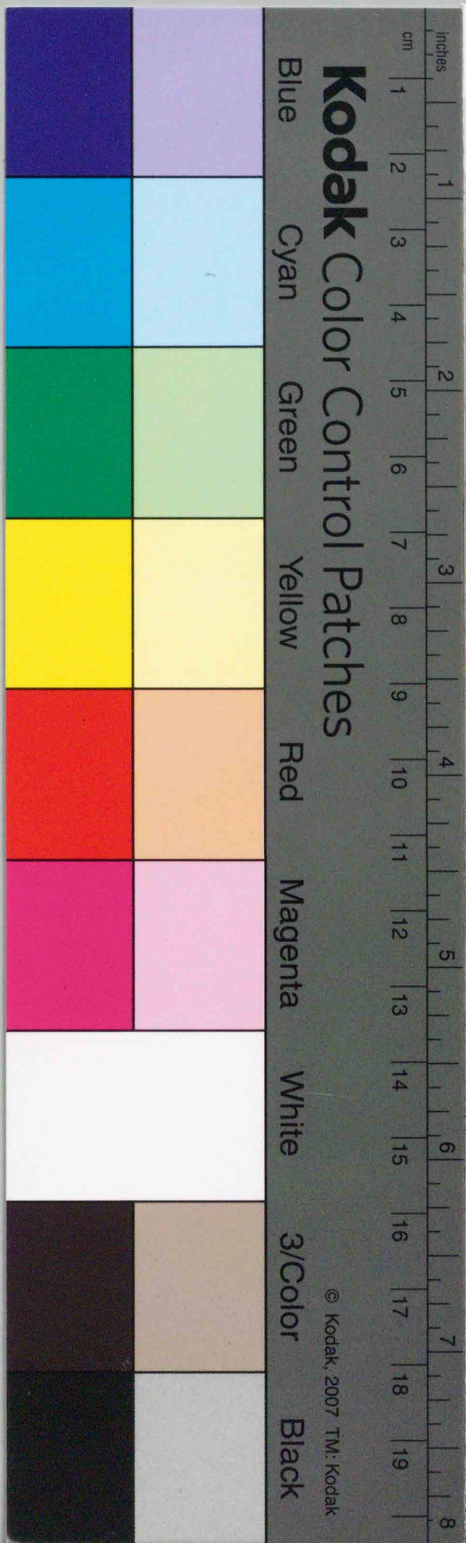


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



中國教科書

一卷



Small label on the book spine with text: 教 4 20



~~scribble~~

資料室

教科書文庫
4
810
41-1930
2000301999

395.7

Y019

4

4

くさつ
の
り
を
お

寺

15

kinomocsmu



文 部 省 檢 定 濟
昭 和 五 年 一 月 廿 一 日 中 學 國 語 科 教 用 科

中 國 文 教 科 書 卷 一

吉 田 彌 平 編

東 京 光 風 館 藏 版

広島大学図書
2000301999

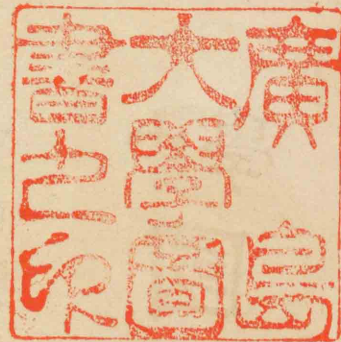

中 國 文 教 科 書 卷 一

吉 田 彌 平 編

東 京 光 風 館 藏 版



影尊御ノ時當宮政攝



文庫録

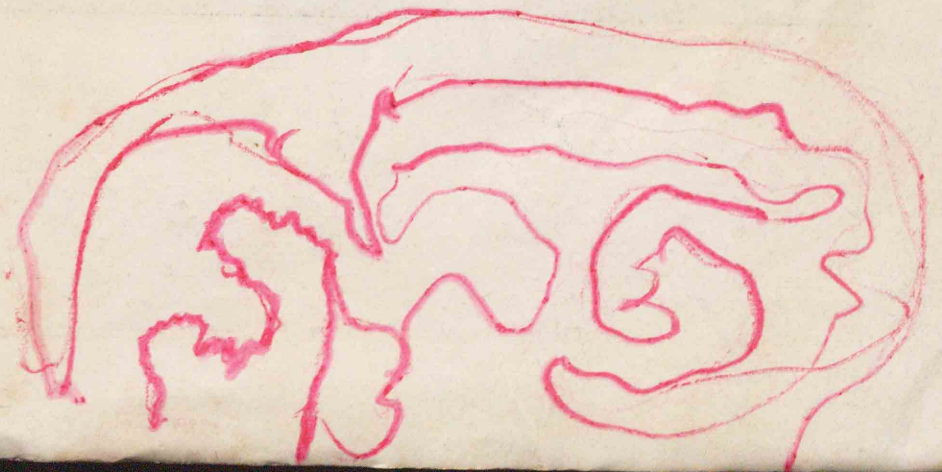


例
言

本書は中學校國語科の講讀用教科書として編纂したものです。全卷を通じて現代文を中心とし、なほ生徒の學力に應じて各時代を代表する文學を併せ採りました。そして最後に國文學史の概要を附説する仕組にしました。

本書の句讀や送假名は國定小學讀本を標準としました。地圖繪畫寫眞などで本文の理會に必要なものは成るべく挿入しました。肖像や筆蹟なども賢哲名流の倂を偲ぶよすがになるものをつとめて取入れました。

各課の題目の下には作家の氏名又は雅號を記し、文の終りには出所



を示して置きました。編纂の都合で原文の姿のかはつて來たものは、唯據る所のみを記すことにしました。原文に對しては十分の敬意を表しながらも、なほ多少の手を加へて體裁を整へねばならないことのありましたのは甚だ不本意であります。しかし、これは本書の性質上、まことに已むを得ないことですから、偏に諸家の寛恕を請ふ次第であります。

昭和四年九月

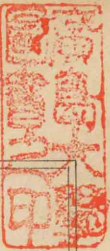
中學國文教科書 卷一

目次

一	清淨の國	……………	一頁
二	菊の馨	……………	石井國次 五
三	若き生命	……………	三木露風 四
四	比叡の鳥	……………	高濱虛子 一六
五	洋上の夕照	……………	水谷 勝 三
六	競 漕	……………	久米正雄 七
七	菖蒲の節句	……………	島崎藤村 四〇

八	花の若武者	岡谷繁實	四
九	安井息軒	森林太郎	五
一〇	試膽會	正木不如丘	五
一一	童心	北原白秋	七
一二	ポチ	長谷川二葉亭	七
一三	猫と鳥	夏目漱石	五
一四	夏休み	幸田露伴	五
一五	明月の影	矣	
一六	富士登山	荻原井泉水	一〇〇
一七	月見草	阿部次郎	一三
一八	凌霄花	吉村冬彦	一四

一九	ツェツペリン伯號に乘りて	圓地與四松	一九
二〇	美しい球	矣	一九
二一	保昌と袴垂	萩野由之一	四
二二	ベッカストリニ	松村武雄	一五
二三	十國峠	高山樗牛	一六
二四	山の歡喜	河井醉茗	一七
二五	水の都	大類伸	一七
二六	月の天橋	徳富健次郎	一八〇
二七	物思ふ夜	櫻井忠温	一八六
二八	明治天皇の御遺物	笠井信一	一九一



中學國文教科書卷一

一 清淨の國

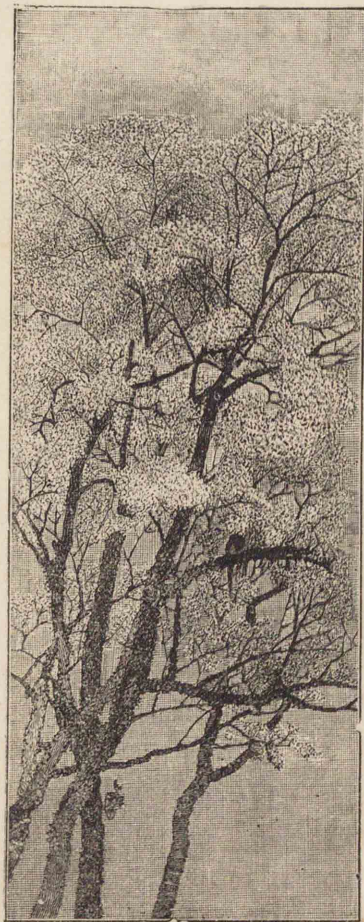
我が國は清淨の國である。我が國民は一般に清淨の美を愛する。この心が清淨である、その衣、その食、その家、いづれも清淨である、その國一體が清淨である。清淨の美を解せぬものは、到底日本を解することは出来ない。

敷島の 大和心を人間は、

朝日に匂ふ山櫻花。

敷島の
本居宣長の歌

この歌が一般國民に愛誦されるのは、國民精神の清美を歌ひ出でてゐるからである。一體朝は一日の中で最も清々しい時である。空に些かの曇もない朝、東天に朝日の輝き



櫻 花 (阿部春峰筆)

い。その清らかな光に、櫻花の中の粹たる山櫻が、ばつと映りあつてゐるのは、なほ更に清々しい。これぞ大和魂の本体である。されば大和魂は、清淨の粹であるといふことが

出る
さま
は、實
に清
清し

田子の浦ゆ
山部赤人の歌

扶桑
我が國の異名

出来る。

田子の浦ゆ打出でて見れば、眞白にぞ

富士のたかねに雪は降りける。

緑の波が一面にたゞひて、さながら鏡のやうな田子の浦、そのあなたに、どこから見ても形の變らない扶桑の靈山が、玲瓏として天をさゞけて立つてゐるのは、なんと清淨の極みではないか。此の歌が名歌として世にもてはやされるのも、つまり、此の美の琴線に觸れてゐるからである。滄海の中に在つて、山青く水清き我が日本は、土地そのものが、すでに清淨である。開闢以來未だ曾て外國に汚されたことのない我が三千年の歴史が、すでに清淨である。他民



田子の浦をか見たる富士

族の血液の多くまじらない我が民族の血統がすでに清浄である。しかのみならず、我が國民は善を好んで悪を憎み、正に就いて邪を排し、直を愛して曲を嫌ひ、弱を扶けて強を挫き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よく勇に、風流をさへ解して、ものゝあはれを知つてゐる清浄な國民である。我が日本が古來東海の君子國と呼ばれるのも、尤

の事ではないか。(大町桂月の文に據る)

二 菊の馨

石井國次

石井國次
教育家
學習院教授
明治七年茨城縣
下妻町生

我が天皇陛下の允文允武におはしまして、萬民の上に君臨せらるべき聖徳を具へさせ給ふことは申すも畏きことながら、御幼少の御學習院御在學中の御事どもを拜し奉るにつけても、洵に感佩に堪へぬことが多いのであります。まづ第一に驚嘆し奉るは、御記憶の拔群にあらせられることとであります。私は今まで多くの學生に接して参りましたが、陛下のやうに御記憶の強いお方は見受けたことがありません。蟲の名でも貝の名でも、聯絡も系統も無い事ま

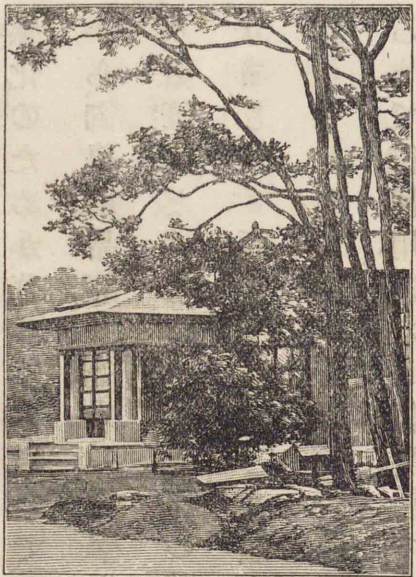
で、一度御覺えになつた以上は、決して御忘れになるといふ
ことがありません。

かく御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、何でも
いゝ加減にして置く事が御嫌ひで、詳細に御質問になり、又
御自分で徹底的に御研究になるのであります。例へば歴
史で聖徳太子の事を申し上げますと、御歸りになつて参考書
を御調べになり、聖徳太子の憲法とはどんなものか、三寶と
はどういふ事かと御研究になる。理科で蝶の御話を申し
上げると、蝶類圖説を御調べになつたり、盛に御採集になつ
たりして、日本産の蝶は勿論、外國産のものまでも御觀察に
なる。或は電氣の御話を申し上げますれば、種々の器械を御取

三寶

佛法僧
聖徳太子の憲法
の第二條に「篤
く三寶を敬へ」
とある

寄せになつて御實驗遊ばされ無線電信電話の事まですつ
かり御理解になるといふ風であります。旅行登山の御趣
味も御豊富にあらせら



生 物 御 研 究 所

れ、單なる御運動として
の外に、地圖や案内記を
よく御調べになり、其處
の産物や動物、礦物から
氣象の事まで熱心に御

研究になる。萬事がかういふ風であらせられるから、御知
識の確實で、且深みがあらせられる事は、實に驚嘆し奉る外
はありません。

明治神宮
 明治天皇昭憲皇
 太后を奉祀する
 神宮
 東京市外代々木
 に鎮座

明治神宮に参拜して明治天皇の日常御使用になつた御調
 度品を拜觀した者は、誰でも其の御質素なのに感泣しない
 ものは無いと思ひますが、陛下も亦其の御遺傳のためか御
 感化のためか華美が御嫌ひであらせられます。それです
 から、御學用品等も全く一般學生と同様な品を御使用にな
 り、鉛筆などは、當時一錢五厘の驚印のを好んで御使用にな
 りました。而もそれがごく短くなるまで決して御棄てに
 なりません。消ゴムも當時四五錢位のを、豆粒位にな
 るまで御使用になり、雜記帳でも、半紙や畫用紙でも、決して
 無駄には遊ばしませんでした。それで、大正三年三月陛下
 が初等科を御卒業あらせらるゝや、御高德を一般兒童に拜

リボン
 Ribbon

せしめたならば國民教育に裨益する所があるだらうと考
 へて、陛下の御使用になつた背囊、教科書、雜誌、筆入から、帳面、
 鉛筆、ゴム、並びに御製作になつた手工品、圖畫標本等を拜借
 して一室に陳列し、御教室、御控室等すべてを公開して、一週
 間に互り、市内及び近縣の小學兒童に拜觀せしめたことが
 あります。其の時、毎日何千といふ兒童が校長教員につれ
 られて参り、私共は手別けをして種々説明を致したのであ
 ります。たしか京橋か日本橋あたりの學校と思ひますが、
 女の子でかなり綺麗な服装をして、幅の廣いリボンなどを
 つけて來た一組がありました。私が其の女生徒たちに説
 明をしてから、皆さんは、殿下でさへかやうに御質素であら

せられる事を拜見したら、もう立派な着物だの、幅の廣いリボンだのを家庭でおねだりが出来ないでせうね。」と申したら、たいそう感激して泣いた生徒が随分ありました。陛下は又非常に規律正しいことが御好きであらせられます。朝の御起床から御拜御食事御通學御復習御運動御入湯御寢まで、實に規則正しい一日の御日課を御守りになつて御變更になる事は容易にありませんでした。従つて色の事を遊ばすにも、すべて規則正しい御計畫をお立てになつて組織的に遊ばすといふ風であらせられます。陛下はまた實に公平無私であらせられます。例へば戦争ごつこをやつたあとで、私が其の審判や講評など致します

時、御自分の方に不利な事がお有りになつても、少しもお包みなく御申出になる。角力で陛下が相手をお投げ遊ばされて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣附かなかつた少しの踏切などが御自分にお有りになると、私に踏切があつたから負です。」と御主張になる。審判者や行司が少しでも不公平な判定をすると、非常に御嫌ひになる。仲間の者が、其の方が御都合がお宜しいではございませんか。などと申し上げると、そんな不正直な事はいけません。」と仰せになる。従つて「歴史上の事柄を御批判遊ばされる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案をお下しになる。」實に陛下の御心は少しの曇もない明鏡であらせられます。それ

ゆゑ陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりと顯れて、隠すことは出来ないであります。陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數の少ない方で、御世辭などは仰せられないが、誠に思ひやり深くあらせられます。従つて御幼少の時分から、普通の子供に有りがちな、友達にからかふとか、意地悪い事をするとかいふやうなことは決しておありになりませんでした。そして御學友に對しても、御側の者に對しても、好き嫌ひといふことが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍従や侍従武官などにも、新舊の差別なしに優しく御接しになるさうです。而も舊い人をいつまでも御忘れになら

ずに、元の侍女や御學友などが御伺ひ申すと、大變に御喜になりますし、時々の御召もあります。私どもにもやはり其の通りで、御誕辰其の他の御祝にはきつと御召があり、御機嫌伺に出れば、特別に拜謁を許され、御暇の時は何時までも御引止めになつて御言葉を賜ふのであります。先年御外遊の御時には、私はロンドンやパリで御迎へ申し上げましたが、屢、御召を蒙つて御陪食を賜はり、内外諸名士の前でも、先生、先生と仰せられるので、覺えず、無上の光榮に感泣した次第であります。人心がだんく、荒んで、師恩を忘れるどころか、全くこれを念頭におかないやうな青年學生の多い今日、陛下のかゝる御態度は、實に貴い御模範ではあります

まいか。

陛下の御盛徳を稱へ奉ることは、到底私どもの能くするところではありませんが、要するに陛下は御天性實に間然する所の無い御方で、現つ神としての神々しい御性格を先天的に御具へあそばしていらせられると申し奉るほかはありません。
(教育研究)

三 若き生命

萌えよ、萌えよ、春の草。
生ひよ、生ひよ、野邊の草。
あたらし夢をはぐくみて、



三木露風

三木露風
名は採
嘗て羅風と號し
たこともある
詩人
明治二十二年兵
庫縣龍野町生

春の生命をのばせかし。

長き眠の冬の土
いつしか覺めてよみがへり、
芽をふく千草、八千草の
生の力の不思議さよ。

小川の水は温みたり、
日は晴れ、空は薄霞み、
つぐみや、ひわや、鶯や、
さやかにあそぶ彌生月。



萌えよ、萌えよ、春の草。
生ひよ、生ひよ、野邊の草。
緑の褥をしきつらね、
若き生命を飾れかし。
(青き樹かけ)



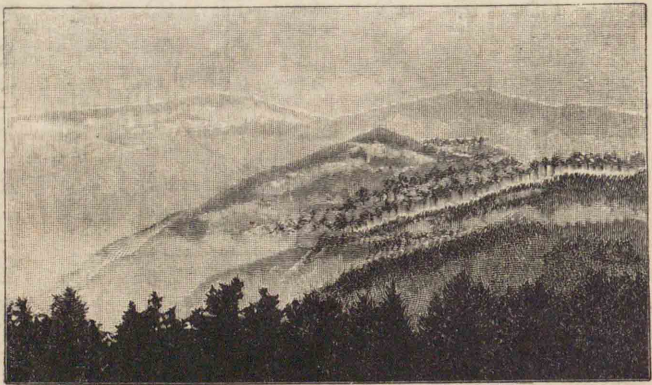
高濱 虚子

四 比叡の鳥

寢床を出て、楊枝を使ひながら湖水の見える部屋にいつて見る。朝日が一杯にはひつてゐる。

湖水と思はれる邊は雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷

高濱虚子
名は清
俳人
明治七年愛媛縣
松山市生
湖水
琵琶湖
部屋
比叡山東塔の宿
院の室



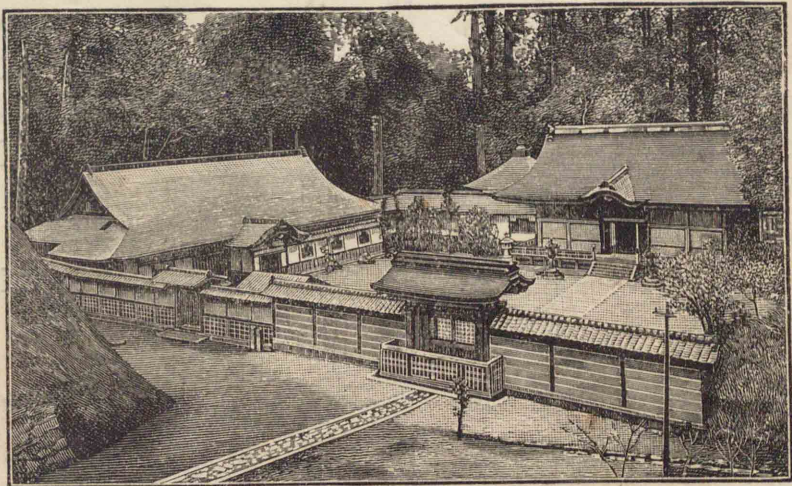
比 叡 の 杉

になつてゐるので、我が眼よりやゝ高く、やゝ低く、數知れぬ杉の梢が、さながら銚のやうに突つ立つてゐる。左手には北谷の向ふに當る杜が、鋸の齒のやうな杉を背に並べて湖の方に流れてゐる。空氣がいやが上に清いで、近景の杉の梢も、遠景の杉の杜も、ともに新鮮な色をしてゐる。さうして、その間を薄い霞が流れてゐる。

非常に静かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞え

ぬ。
たゞこの天地を我が物顔に啼きさへづつてゐるのは小鳥だ。何といふかはいゝ聲の小鳥があるものであらう。名の分らぬのが残念だ。その杉の梢で一羽啼いてゐる。彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。又遙か向ふの谷深く他の一羽が應じてゐる。よく耳をすますと、なほ二三羽の聲がどこかで聞えるやうだ。
この小鳥の合奏を破るやうな別な聲の小鳥が突然、その間に高音を張る。前の小鳥程優しい聲ではないが、又りゝしい所があつて、その聲の空山に響く趣が何とも言へぬ。これも名は分らぬ。それが一羽ではない、三羽、四羽と段々聲

の主が殖えて来る。前の小鳥が縦糸なら、この小鳥は横糸だ。互に錯綜してよく諧調を保つ所が面白い。
突然けんくとけたゝましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峰にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやゝ急調だ。山鳥でもあらうか。前の二つの小鳥で織りなした美しい絹をたゞ一聲に引裂いたかと疑はれる。暫くして、その聲は谷の底の底、峰の奥の奥に浸みこんでしまつて、あとはもとの静かさになる。
眞先にその静かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれる緋のやうに美しい。一つの緋が置かれると、また縦糸を織つて前の小鳥が啼く。横糸を織つて次の小鳥が啼く。緋



比叡山延暦寺

が鳴く。縦糸が鳴く。横糸が鳴く。この絹をまた山鳥が破るのかと思ひながら待設けてみると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐて、谷の神社の鰐口が口をあけてつぶやくのかと思はれる。他の鳥の聲々が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すの

が面白い。友は啄木鳥だらうといった。二人の小僧は山鳩だらうといった。湖水の上にはまだ漠々とした白雲が漂つてゐる。杉の梢を渡る霧は少しづつ薄らいで、だんくと谷が深く見えて来る。(新寫生文)

メ五 洋上の夕照

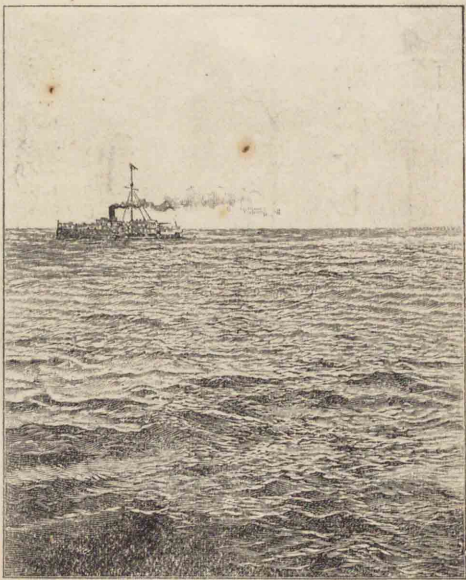
水谷 勝さかき

汽船は今しも太平洋の上を走つてゐる。わたしは通風筒の蔭に椅子を据ゑて、それに腰をかけて、浪を見てゐる。浪の寄せて来る繰返しのなかに、わたしはいろくな幻をかべる。

水谷勝
詩人
明治二十七年東
京市生
太平洋
アジヤ洲及
びオースト
ラリヤ洲と
南北兩ア
メカ洲との
間にたへ
てゐる大洋

Pacific Ocean

ネクタイ
襟飾



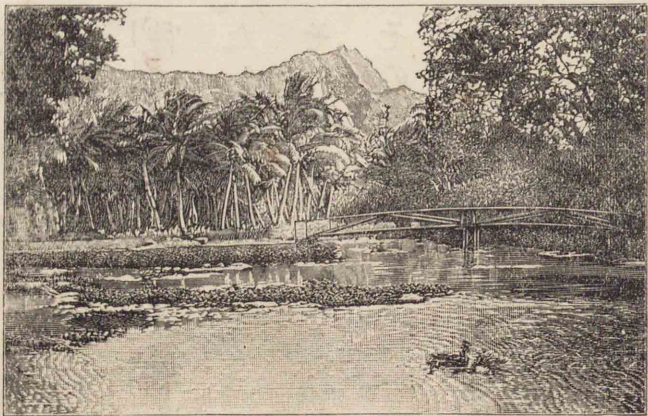
太平洋上の汽船

次から次へと浪は幻を生む。そして、ばつと白い波頭が碎けると、幻は消える。みんなな日本に残つてゐる人たちの顔だ。遠く離れたたと、わたしは思ふ。

南をさしてだいぶ来たから、この夕暮は快活である。風も氣輕である。わたしのネクタイは、ともすれば首に巻きつく。帆綱は口笛を吹いてゐる。ほがらかなたはむれ心で、——なんだか心が軽い。海なんて、こはくない。汽船はちつとも揺れはしない。ぐんぐん走つ

エンジン
蒸氣機關

布哇
Hawaii
大洋洲北部
の群島
米領



布哇ワキイ公園

てゐる。エンジンの音はをどる心臓である。この汽船は愉快な若者だ。

もう三晩も寝たら常夏の國布哇だ。くすんだ間服あひらのズボンを脱いで、さつぱりとした白のズボンと白の靴とをはかう。そして心のなかに勢のいゝ噴水をしかけよう。

寂しさや悲しさなんかは、ほとばしる心の噴水と一緒に空に散つてしまふがいゝ。わたしは仔馬のやうに、なんにも考へま

い。そして、常夏の國なる布哇の海岸の白砂を、さわやかに踏まう。

ところで、今はすつきりした夕暮、さわやかな初夏の感じだ。嘗て地圖で見た太平洋が、こんな海とは知らなかつた。わたしは仕合せだ。

その後であつた。わたしは美しい夕焼雲を見た。そして、その夕焼雲が美しかつただけに、わたしの胸は痛んだ。

東も西も水ばかり、

南も北も水ばかり、

太平洋のまんなかで、

汽船の上からふとも見た

夕焼雲がわすられぬ。

いつでもあんな美しい

夕焼雲があるんだろ。

けれど誰にも見られずに、

さびしく消えて行くんだろ。

東も西も水ばかり、

南も北も水ばかり、

太平洋のまんなかの、

さびしいけれど美しい

夕焼雲がわすられぬ。

それは沈みゆく太陽のほしいまゝな美の溢れであつた。

紅く染めだした雲。雲と雲との間の匂はしい空。はた雲の端に光る金の條。そして厚い雲の下の静かな紫。海は浪を揚げて、夕暮を溶かさうとしてゐた。西へ遙かな紅が流れ、空と水とうち、浸るあたりに、光の金の蛇が、きらきらと躍つてゐた。

わたしの心は、思ひがけぬ美しさに、すっかり打たれてしまつた。汽船の甲板に立つて、手すりにつかまつてゐる手は、歡びにふるへた。だが、あまりにも壯麗なものを見る時、心の痛まぬ人があらうか。わたしの心は痛んだ。わたしの眼はまばゆかつた。わたしの胸には溜息が充ちた。この美しさをまともに眺め得

るだけのよい感覺を、わたしが持たぬのを恐れた。それにしても、このほしいまゝな美の溢れのもつたいなさ。神は人の目を豫期することなしに、いつもかゝる夕焼を、この太平洋のまんなかにお示しになつてゐるのだ。(遠き幻)

六 競 漕

久米正雄

久米正雄
文學者
明治二十四年長
野縣生
大學
東京帝國大學

Course
競漕場

競漕の日は來た。空は朝から美しく晴れあがつた。大學の事務室から小使が朝早くやつて來て、合宿所の前に櫂色の大きな旗を立てた。それが晴れがましく見えた。午後になると、晴れたまゝに風が吹いて來て、應援船の旗をはたくと鳴らした。コースには可なり荒い波が立つた。

文農
文科と農科

Uniform
制服

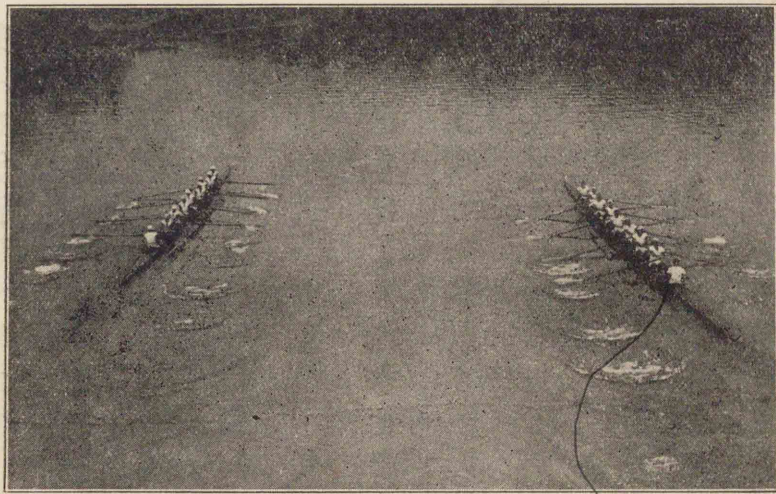
臺船
棧橋につないだ
方形の船
棧橋から端艇に
乗移る便に供す
る

しかし、愈々文農の競漕が始らうとする頃になつたら、珍しい夕風が来た。

選手は皆樺色のユニフォームを着た。それが久野には何だか身が緊つたやうに感じた。土手では観衆が一種の尊敬と好奇との念を以て、この樺色の服を着た選手たちに道をあけた。文科の短艇が先づ拍手に送られて臺船を離れた。窪田等はいつともよりは緩かな調子で漕出した。そして三十本ほど試漕をした。やがて審判艇の差出す綱に繋留した。續いて農科の艇も繋がれた。艇庫と土手と應援船とから文科あ！農科あ！樺あ！紫い！などと呼ぶ聲が錯綜して起つた。審判艇は二つの艇を

浅草岸
向島堤の對岸
隅田川の右岸

曳いて發足點へ向つた。漕手は皆艇の中に寝てゐた。久野は舵の綱をつまぐりながら應援の聲を聞いてゐた。艇は發足點の赤い浮標に着いた。水路を見渡すと、風は全く風いでゐるのではなかつた。絶えず北東から吹いて來て、艇首を左へ曲げた。久野はそれを直すために、幾度も二番に軽く櫂を入れさせなければならなかつた。艇首を曲げて出發しては、只さへ浅草岸へ向きたがる艇の癖を一層激しくするやうなものだ。若し水路を外れて浅瀬を漕いだら、艇脚のとまるのは明かである。岸の審判所では、文科の艇は出過ぎたから櫂を入れるな」と叫ぶ。久野は氣が氣でなかつた。そのうちに用意の令が下つた。艇首は又一



(高三對高一) トーダスの漕競

瞬間の強風に曲げられた。「え、まゝよ、もうなるやうになれ。」と久野は目を瞑つた。と同時に、號砲が響き渡つた。久野は、用意と號砲との間がほんの一瞬間であつたのに、ひどく永いやうに思つた。二つの艇の櫂は同時に水にはひつた。

久野の眼には、敵の艇と自分の艇との前方に白く光つて

シート
Seat
席

ある水路の外何もなかつた。

久野の艇は、どうも滑り出しがよくなかつた。「こいつはいけない。皆慌てたな。」と窪田と久野は同時に思つた。敵艇を見ると、確かに一二シートは此方よりも出てゐるらしい。「ゆつくり！」と窪田が叫んだ。久野は更に大きな聲でも一度その言葉を全艇に傳へた。皆の調子がやつと合ひだした。この時、競漕中に敵艇を野次るので有名であつた農科の舵手が「敵艇を抜くこと約半艇身！」と叫んだ。久野は言はせもあへず「嘘だぞ。」とどなつた。今までだまつてゐた久野は、一度その言葉を言つて了ふと、急に口の緊りが解けるやうな氣がして、恐しく雄辯になつた。その中に農科の三

スプラッシュ
水をはねと
ばすこと

水門
出發點の吾妻橋
下から到着點の
言問に至る途中
で左岸の一地點

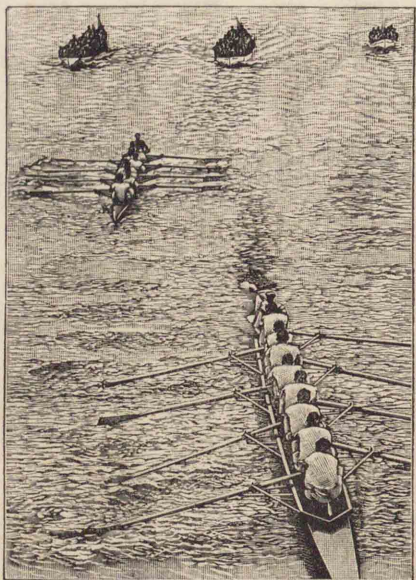
番が大きなスプラッシュをした。水煙が鮮かにばつと騰つた。久野は機を得たと言はんばかりに「やつたぞ、あんな大きなスプラッシュを」と叫んだ。味方一同これに元氣づいた。敵の艇は久野に野次られて却て沈黙して了つた。やつと二つの艇は並んだ。そして水門前で文科は約半艇身先んじてゐた。それでも、農科の舵手は向ふはもうへたばつたぞ！などと言つた。久野も、なあに、此方が出てゐるぞ、と野次り返した。しかし、心持には少しもそんな言葉戦をしさうな餘裕がなかつた。水門に來かゝると、久野は「さあ水門だ」と敵に先んじて叫んだ。如何なる舵手でも言ふに定まつてゐる場所の指示を、

ピッチ
調子
Pitch

機先を制して叫ぶのも、一つの戦術であつた。早く言つた艇が、晩く言つた艇より先にその場所にとゞいた譯だから。後ればせに、農科は水門で特別の力漕を十本やつた。それで兩艇はまた並んだ。後ろから追ひかけられると、何だかずつと追抜かれるやうな氣がするものだ。久野の艇は、何だか何時もより艇脚が遅いやうであつたが暫くすると、又文科の艇がじり／＼と拔出した。久野は「この調子で」と叫んだ。農科の艇は、沈黙してゐた。そして渡場での力漕十本は、もう此方に對して何の効力もなかつた。窪田は半眼でその敵の力漕を見やりながら、やつと安心してピッチを上げ出した。

ラスト、ヘヴィ
Last-heavy
最後の力漕

洗場では半艇身以上先んじてゐた。併し此處での半艇身
くらゐの差では、敵のラスト、ヘヴィが利けば何の役にも立
たない。久野は「あと一分だ。もう死んでもいゝぞ。」などと
激励した。この「あと一分」といふ練習中に用ひ慣れた言葉
が、何よりも選手を元気づけた。一分間なら、いくらへたば
つても漕げる筈なのだ。
皆が疲れて來た。すると、不思議に艇がよく出だした。文
科の艇は、疲れて來ると各個人の癖が取れて、全體としての
調子がよく揃ふ。協力が此の時始めて完全に出來た。そ
して窪田の櫂につれて、各は機械的に身體を前後に動かし
た。



決勝線に入らうとすつ間

農科のラストも、實によく出た。しかし、それを見て久野が
氣遣つてゐる間に、文科の方のヘヴィも非常によく利いた。
多年の老練で窪田の
ピッチがぐんぐん上
つた。「もう十本！」
決勝線に入るまでは
随分長く感じられた。
久野は、ひよつとす
と、もう決勝線へはひ
つてゐるのに、審判の號砲が發火しないのではないかと思
つた。その刹那、號砲は轟いた。皆は漕ぎやめて、艇内にど

つと身を伏せた。この時、久野は嵐のやうな喝采が水上に響き渡つてゐるのを初めて聞いた。それは決勝點に近づく時から鳴りもやまなかつたのであるが、彼の耳にははひらなかつたのだ。

「どつちが勝つたのだ」と、二番の早川が苦しい息の中から情ない聲を出した。

「安心したまへ、僕等だ」と久野は答へた。しかし、久野自身も勝利を確信してゐるのではなかつた。そして、審判所に掲げられた樺色の旗を見るまでは、安心がならなかつた。喝采はまだ續いてゐた。今までに類のない程の接戦であつたが爲に、敵味方のいづれにも屬してゐない觀衆までを

も熱狂せしめたのである。

「窪田君艇を岸へつけようか」と野は言つた。

「待ち給へ。もつとゆつくりでいゝよ。こんな事はめつたに無いんだから、ゆつくり勝利の心持を味はうぢやないか。」と窪田は答へた。そして、艇は喝采の渦卷の中で、猶も靜かに水に漂はされてゐた。

その時、久野はふと農科の艇を見た。それは、今岸に着けられた處であつた。そして、野次が敗れた選手を艇内から扶け起して岸へ上せてゐた。三番の大きな男が、二人の野次の肩に凭れかゝつて、涙をかくしながら運び去られた。彼等はわざとしてゐるのか、眞に動き得なかつたのか、とにかく

く一人では立てぬまでに疲れ果てゝゐた。たつた半艇身の差が、何といふ感情の相違を造つた事であらう。時間にすれば二分の一秒を出さない間である。空間にすれば二間と出ない處である。而して全體の水路から見て眞に何百分の一に足らぬ間である。この少しばかりの、しかも効果の恐しく大きな差は、そも何處から出たのであらう。一本の櫂毎に一寸づつ差が出来るといふ豫定が主將の窪田にあつたであらうか。毎日の練習の何分間かの優越が此の差を作つたと、久野自身も信ずる事が出来るであらうか。もし此方の選手の誰かゝ一本の櫂を流したら、どうだらう。忽ち勝敗の數は顛倒するかも知れない。

久野がちよつと舵を入れ損つたら、どうだらう。忽ち艇は追抜かれたかも知れない。眞に危い勝負であつた。「それはともかく、勝つたには違ひないんだ。」と、久野は置去られた敵の艇をなほも見ながら考へた。その間に、應援船が四方から漕寄せた。選手は、やつと蘇つたやうに、勝利を感じ出した。勝利といふものゝ齎す感情は、凡べてのそれの中で最も妙な、複雑なものであると久野は思つた。夕日が、今戦のあつた水路を掠めてゐた。久野は再び岸にゐる觀衆及び近くに漕寄せた應援の人々の顔を珍しげに見廻した。

(學生時代)

島崎藤村

名は春樹

文學者

詩人

明治五年長野縣

木曾生

花祭

四月八日釋迦降

誕の日花をたむ

ける祭事

クリスマス

十二月二十

五日の基督

降誕祭

Christmas

鍾馗

支那で疫鬼を驅
るといふ神

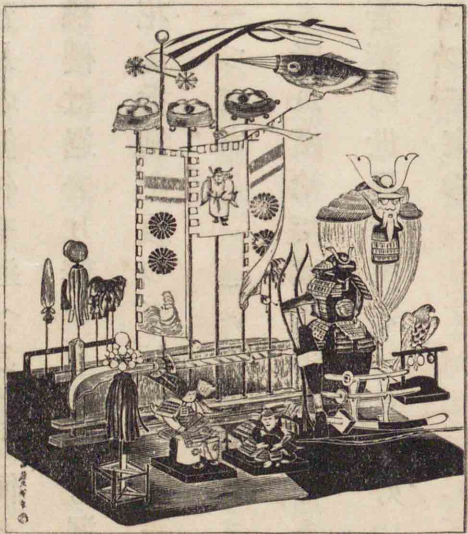
七 菖蒲の節句

島崎藤村

國民の記念日でもなく、氏神の祭禮でもなく、卯月八日の花祭とか、暮のクリスマスとかのやうな宗教的意味のある祭日ではないまでも、一年に二度の節句の祝が、たゞ幼い者のためにあるのは嬉しい。女の兒のためには三月の桃の節句、男の兒のためには五月の菖蒲の節句のあるのは嬉しい。

あの三月の節句に取出されて、今にも合唱でも始めさうな雛や、古風な少年音楽隊のやうな五人囃子の代りに、五月の節句を祝ふためにあるものは、鍾馗や、鬼や、金時や、桃太郎な

どの行列である。五月の空に高く翻る鯉轍は、恰も子供の國をそこに打建てたかのやうにも見える。狭苦しい町の中にあつても、あちこち



五月の轍

屋根の上に鯉轍を望むのは楽しい。鱗を描いた魚の形、長い尾、大きな眼空にかゝる金と赤と黒とのあの色彩、動きを悦ぶ子供の心を樂しま

せるやうなあの飛揚。大人の心をも子供の心に返すものは、あのはたくと風に鳴る鯉轍の音である。

その他五月の節句を祝ふものは、室内にも屋外にもあつて、軒に葺く菖蒲までがお伽噺の情調を誘ふのも懐かしい。五月の節句を迎へる頃は、何と言つても季節の感じが深い。桃櫻は過ぎり、椿や木蓮にも遅く、山吹や藤や満天星などの花が香氣を放つ五月の初は、一年の中の最も楽しい季節の一つである。遠い山々へはまだ雪の來る日があつて、雨でも降れば、冷では寒いこともあるが、私たちの周囲は、もはや若葉の世界である。この好い時候に、楽しい菖蒲の節句がやつて來る。

桃の花が女の兒にふさはしいやうに、菖蒲はおのづから男の兒にふさはしい。一ふし鋭いところのある葉の形も好い。爽かてみづく、しい葉の色も好ましい。あれを軒にかけるといふことも、優しい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯がたつて、あの香氣が人を酔はせるばかりでなく、私たちの身をも心をも温めてくれるのも嬉しい。青々とした菖蒲の浮いてゐる中を搔分けて湯槽に浸るのも楽しみだし、あの葉が私たちの肌などへべたつと附いた時の心持もわるくない。

粽の香は幼い日の香である。粽ばかりは鄙びた處で作られるものほど好い。あの細長い笹の葉の卷付けてあるのを解いて、青い色に蒸された香を嗅いだ子供の頃の心持は、今もなほ忘れられない。粽の外に、柏餅赤飯などと數へて

來ると、五月の節句を祝ふもので、何がなしに懐かしい思を誘はないものはない。私たちの少年時代は、まだ軒の菖蒲にも残つてゐるやうな氣がする。(藤村讀本)

八 花の若武者

岡谷繁實

大阪夏の役天王寺口の戦に、眞田幸昌敵と組討して取りたる首を鞍の四方手に付け、負うたる傷より流るゝ血しほ拭ひもあへず馳歸る。毛利、豊前守勝永、榎島、玄蕃允昭光、幸昌が傍に立寄り、扇を開きて打扇きつゝ、さてもくゝと大いに感じけるに、父幸村も喜悅の笑を湛へて、手は淺きか。と尋ねければ、幸昌は薄手にて候。と答へたり。

岡谷繁實
上野館林藩士
勤王家
修史局編修官
大正八年歿
年八十五
天王寺口の戦
元和元年(三、五)
五月六日
眞田幸昌
通稱は大助
幸村の長子
元和元年(三、五)
戦死
年十六

明くる七日、和議の將に成らんとするを聞き、幸村陣より幸昌を城内に返さんとて、近く之を呼び、汝、左衛門が子たる故を以て諸將と肩を比べて、配を取ること、身の面目に非ずや。父は今日討死と思ひ定めれば、今生の名残に、父をよく見覺えて、更に悲しみ歎くことあるべからず。此の軍愈味方敗北して、秀頼公御自害あらば、其方も直ちに腹搔切つて、死出の御供申すべし。命助らんとて、必ず降人などに出て、父が名を汚すべからず。若し又秀頼公此の度の死を遁れ給はゞ、假令何れも自害に及ぶとも、其方は命を全くして、下人一人にても生残りたる者あらば、扶持し召連れて、秀頼公を守護し申すべし。くれぐれも父が武勇の名を汚すこ

伊豆守
眞田信幸
幸村の兄
萬治元年
卒
年九十二

とあるべからず。是、子たる者の孝行の第一。親の志を繼ぐこそ忠義なれ。早々城内へ罷り歸れ」とぞ言ひける。幸昌父が詞を聞く中より、落涙に袖を絞りけるが、やうくに歎きを止め、情なき仰かな。討死と思召し定め給ひなば、大助にも共に討死仕れとこそあるべきに、如何でさは宣ふぞや。秀頼公を見立て申す事忠義に候はゞ、父上其の任に當り給ひてこそ、かひはあるべけれ。然るに父上は討死ありて、弱年の某に罷り歸れとの儀、心得難く候。關東勢の中には、伯父伊豆守殿を始め、一族の人々もおはし候へば、父が討死に、忤の大助は何とて一緒にあらざるぞや。父を棄てて、腑、甲斐なくも陣屋より城内へ遁れ歸りしか。など嘲り給



村幸田眞
(典辭史歷本日)

はん。他人はさておき、一族親戚への面目、甚だ以て立ち難し。秀頼公を御見立て申さんは、御譜第の人々多ければ、大助が罷り歸るにも及び候はず。又去年母上に別れ奉りし後、御文の便に、「生きながらへて相見んは願はしけれども、萬一の際には必ず父上と同じ枕に討死せよ。かりそめの名こそ惜しけれ」と誠め給ひしこともあれば、くれぐれも御免下さるべし。御一緒に今日の軍に罷り立ち、せめて雑兵の二三騎も討取り、其の後、腹搔切つて、黄泉の御供仕らん」と言切つて、歸

るべき氣色は見えざりけり。幸村も心強くは言ひけれども、今は落涙に及びつゝ、いしくも言ひける嬉しさよ。さりながら、父と一緒に討死することと忠義の道に叶はず。長く命を全くせよといふには非ず、今日は命ながらへて、明日にてもあれ、秀頼公御自害の砌、潔く腹搔切つて、泉下に再會を期すべし。今日の御和睦御相談の事、其の實否知れ難し。さればとて、其の成行を見定めんとて、左衛門程の者が出陣の馬を無下に城へは返されじ。又、戦を猶豫し形勢を窺ふ様子見えなば、必定味方の士氣も衰へぬべし。さるによりて、我はこれより引返すことなり難し。あはれ、世の人の願ふ命二つ持てるこそ、今の我が身

の幸なれ。二つの命を君に捧げて、一つは今日討死して武名を揚げ、今一つは城内へ歸つて、今日明日の體を見届けんとは思ふなり。汝が命はくれども、汝が命にあらず、父が命なれば父が心に任せ、早々罷り歸りて秀頼公の先途を見届け奉るべし。と、詞を盡して教訓しけり。

幸昌やうくに聞入れて、然らば御暇申して城内に罷り歸り申すべし。愈、今日討死と思召し定められしや。と、又父が顔を守り見て涙に打沈む。幸村詞を荒らげ、親子の名残何時まで惜みたればとて、盡くる期あるべしや。左衛門が子の大助、父と引分れて城中に歸り、秀頼公の御生害の際まで附従ひたり。といはれんこと、後代までの譽、餘人の及ぶべき

譽田
大阪府南河内郡
古市村大字譽田

にあらず。早々罷り立てよ」と言ふ。幸昌成程仰にてこそ候へ。父上の御名を預りし此の身世に大切に候へば、寄手の追付かぬ内に御暇申さん」と心強く思ひ切つて父が前をば立出で、馬に乗るべき體に見えけるが、猶も父が方を見遣りて佇むを、幸村近習の者を以て、急ぎ罷り越すべき由催促しければ、せんかたなくも乗出し、幾度ともなく父が方を見返りつゝ、やうく坂を下りて城内に歸りたり。幸村は幸昌を見送り、落つる涙を押へ、昨日譽田にて痛手負ひしが、弱る體の見えざれば、よも最期には人に笑はれじ。心安し」と言ひけりとぞ。(名將言行録)

森林太郎

號は鴨外
醫學者
文學者
醫學博士
文學博士
陸軍々醫總監
東京帝室博物館
總長
舊石見國津和野
藩生
大正十一年薨
年六十一
仲平
安井衛
字は仲平
號は息軒
日向飯肥藩士
幕末の儒家
明治九年歿
年七十八
父
名は朝宗
字は子全
號は滄洲
文化六年(四六七)
歿
年六十餘

九 安井息軒

森林太郎

「仲平さんはえらくなりなさるだらう」といふ評判と同時に、「仲平さんは不勇だ」といふ蔭言が清武一郷に傳へられてゐる。

仲平の父は日向國宮崎郡清武村に二段八畝程の宅地を持つて、そこに三棟の家を建て、住んでゐる。財産としては宅地を少し離れたところに田畑を持つてゐて、年來家で漢學を人の子弟に教へる傍、耕作を輟めずにあつたのである。併し仲平の父は三十八の時江戸へ修業に出て、中一年置いて、四十の時歸國してから、飲肥藩に任用されるやうになつたので、今では田畑の大部分を小作人に作らせることにし

鉄肥藩
日向國南那珂郡
藩主は伊東氏
領地五萬七千石

てゐる。

仲平は二男である。兄文治が九つ、自分が六つの時、父は兄弟を残して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の脊丈が伸びてからは、二人共毎朝書物を懐中して畑打に出た。そして外の人が烟草休をする間、二人は讀書に耽つた。



安井息軒

父が始めて藩の教授を命ぜられた頃の事である。十七八の文治と十四五の仲平とが例の畑打に通ふと、道で行逢ふ人が皆言合せたやうに二人を見較べて、連があれば連に何

筆蹟

旅行中心得の條
道筋に名所古跡
あらは必ず見物
すへし疲れたり
とて見ざれば後
に悔る事多き物
なり柔和謙遜は
旅中第一の寶な
り假にも人と争
ふ心あるへから
ず武藝の試合は
勝負を重する故
わけて此心得を
重しとす夢の間
も忘るまじき事
丑正月翌前一日
半九齋

旅行中心得の條

道筋に名所古跡あらは必ず見物すへし疲れたりとて見ざれば後に悔る事多き物なり柔和謙遜は旅中第一の寶なり假にも人と争ふ心あるへからず武藝の試合は勝負を重する故わけて此心得を重しとす夢の間も忘るまじき事丑正月翌前一日半九齋

事をかさゝやいた。脊の高い、色の白い、目鼻立の立派な兄

文治と、脊の低い、色の黒い、片目

の弟仲平とが、いかにも不釣合

に見えたからである。兄弟同

時にわづらつた疱瘡が、兄は輕

く、弟は重く、弟は大痘痕になつ

て、剩へ右の目が潰れた。父も

小さいとき疱瘡して片目にな

つてゐるのに、又仲平が同じ片

目になつたのを思へば、偶然と

丑正月翌前一日半九齋

いふものも残酷なものだといふ外はない。

仲平は兄と一緒に歩くのをつらく思つた。そこで朝は少し早目に食事を済ませて、一足先に出て、晩は少し居残つて仕事をし、一足後れて歸つて見た。併し行逢ふ人が自分の方を見て連とさゝやくことは止まなかつた。そればかりではない、兄と一緒に歩く時よりも行逢ふ人の態度が餘程不遠慮になつて、さゝやく聲も常より高く、中には聲をかけるものさへある。

「見い。けふは猿がひとりで行くぜ。」

「猿が本を読むから妙だ。」

「なに。猿の方が猿引よりは好く読むさうな。」

「お猿さん。けふは猿引はどうしましたな。」

篠崎小竹
名は弱
大阪の儒家
嘉永四年(五二)
歿
年七十一

仲平に先だつて、體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪へ修行に出て、篠崎小竹の塾に通つてゐた時に死んだのである。仲平は二十一の春金子十兩を父の手から受取つて清武村を立つた。そして大阪王佐堀三丁目の藏屋敷に、著いて、長屋の一間を借りて自炊をしてゐた。儉約の爲に大豆を鹽と醬油とで煮て置いて、これを飯の桑にしたのを、藏屋敷では「仲平豆」と名づけた。同じ長屋に住むものが、あれでは體が續くまい。と氣遣ふほどであつた。中一年置いて二十三になつた時、故郷の兄文治が死んだ。學殖は弟に劣つてゐても、才氣の鋭い若者であつたのに、とかく病氣で、たうとう二十六歳で死んだのである。仲平は訃音を得て、す

古賀侗庵

名は煜

精里の第三子

昌平夔の儒官

弘化四年(二五七)

歿

年六十

昌平夔

昌平坂御學問所

幕府の學校

今の本郷區湯島

にあつた

松崎慊堂

名は復

肥後の儒者

弘化四年(二五七)

歿

年七十四

林

林大學頭



(藏館物博育教) 釋講の堂聖

ぐに大阪を立つて歸つた。其の後仲平は二十六で江戸に出て、古賀侗庵の門下に籍を置いて昌平夔に入つた。後世の註疏に據らず經義を究めようとする仲平の爲には、古賀より松崎慊堂の方が懐かしかつたが、昌平夔に入るには林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。痘痕があつて、片目で、脊の低い田舎書生は、こゝでも同窓に馬

鹿にされずには濟まなかつた。それでも仲平は無頓着に黙り込んで、獨り讀書に耽つてゐた。座右の柱に、半折に何やら書いて貼つてあるのを、からかひに來た友達が讀んで見ると、

今は音をしのぶが岡の時鳥

いつか雲井のよそに名のらん。

と書いてあつた。

「や、えらい抱負ぢやぞ」と、友達は笑つて去つたが、腹の中では稍氣味悪くも思つた。これは仲平が十九の時、漢學に全力を傾注する迄國文をも少々研究した名残で、わざと流儀違ひの和歌の眞似をして同窓の揶揄に酬いたのである。

しのぶが岡

上野の岡

昌平夔はもとは

上野にあつた

仲平はまだ江戸にゐるうちに、二十八で藩主の侍讀にされた。そして翌年藩主が歸國される時、供をして歸つた。江戸がへり、昌平饗仕込と聞いて、仲平さんはえらくなりなされるだらう。」と評判する郷里の人たちも、痘痕があつて、片目で、脊の低い男振を見ては、「仲平さんは不男だ」と陰言を言はずに置かなかつた。

大儒息軒先生としてその名を知られるやうになつたのは、仲平が四十八の頃からである。（鷗外全集）

一〇 試膽會

正木不如丘

俺は小學校時代から試膽會の會員であつた。裁判所の官

正木不如丘
一名は俊二
醫師
文學者
醫學博士
慶應大學教授
明治二十年長野
縣生
裁判所
長野縣長野地方
裁判所

中學
長野縣立長野中
學校

メダル
Medal
賞牌

明治法律學校
今の明治大學の
前身

舎に住む者の子供たちの中、中學へ行くものが發起して、例年花の散る頃になると、一夜試膽會を催す。此の試膽會に一度出席して無事に及第したものは、試膽會長からメダルを下附される。そのメダルを身につけて居る者は、長野の町を横行濶歩することが出来たものである。

俺が入會した年は、會長は子供でなかつた。それまでは、中學五年の者が會長になる規定であつたが、その年は新しく赴任して來た若い檢事が會長になつた。明治法律學校を出た人で、いつも俺たちと同様の木綿緋の筒袖を着てゐた。西郷さんといふ別名を持つてゐた。本名は忘れてしまつた。此の別名は、東京の上野の公園に犬を引つばつて大東

京を見下してゐる豪傑によく似た人だから起つたのださうだ。とにかく大人の癖に、俺たちの牛耳をとつてゐたのだから可笑しい。しかし西郷さんはたつた一年、會長になつただけであつた。



西郷南洲銅像

でに一二回参加してゐた。その晩は例の如く、しよぼく雨が生温かく降つてゐた。晴天順延の會だから、雨が降るまでは、何日でも先へくと日延べになるのだ。

都合よく雨の日が来ると、會長が一軒々々廻つて歩いて、午後八時に裁判所の門前に集れと言渡す。俺は兄貴に連れられて、裁判所の門前に行つた。びしよびしよと雨が降るので、出るから薄氣味がわるい。中學の五年四年は試膽係になる権利がある。それ以下の子は、中學と小學とを論ぜず、被試膽者である。午後正八時になつた時、西郷會長は左の開會の辭をのべた。膽が小さくてはえらくなれぬ。だから、今夜は試膽會をやる。年上の者は試膽者となる。幼年の者は膽を試みられる。が、實は試膽者の方が試みられる者よりは一層膽が大きくなくては出来ないのだ。これから幼年者が

行く道には、あちこちに怪物がある。その怪物は、試膽者その人であることもあらうし、又人形である事もあらう。特に注意するが、メダルを貰ひたいものは、決して聲を出してはならぬ。黙々として、行くべき道を行き、歸るべき道を歸つて來なくてはならぬ。又、駢足をしてはならぬ。膽が太いばかりでは駄目である。十分に注意して、一步誤なく、定められた個所を通過して、その個所に立つ試膽者から規定の[●]を紙に押し、貰つて來なくてはならぬ。

會長はかやうに訓示を與へた後、その夜の通路を委しく話した。俺たちは各自定められた順番の來るのを待つてゐ

た。先に出たものは裁判所の裏門の方へ歸るので、後の人には途中の様子はちよつとも分らぬのである。

俺は年が幼いので、初めから三人目に出かける事になつた。

「八時四十五分、大下三太郎出發！」

號令がかゝつたので、俺は脇の下から汗を流しながら、そろそろと歩き出した。門の前から長い裁判所の土手に沿うて眞直に進んだ時、ふと向ふの桑畑を見ると、とろ／＼と火が燃えてゐる。その火に向つて、背をこちらにして、一人の人が立つてゐる。誰だらう、今頃火をたいてゐるのは、と思ひながら進むと、その火がいつしか消えて、後は何もない。眼の前が餘計に暗くなる。俺は規定通りの[●]をさして

ゐるので、なかく手が重い。やがて、土手を右に曲つた時、前から提灯が一つ来るのを見た。その提灯は、中ぶらりんに往來を上つたり下つたりしながら近づいて来る。提灯だけで、それを持つてゐる人間のみないのが可笑しい。俺はちよつと足を緩めた。その時、俺の傘が急に軽くなつて、上に昇り出した。俺はびつくりして、兩手で傘の柄を握つた。そして思はず傘を見上げた時、右の竹藪から青い火の玉がひゆうと飛んで来て、俺の足もとに落ちた。俺は聲を出しさうになつて、やつと堪へた。その時、傘が又急に重くなつて来て、俺は地に押しつぶされさうになつた。「此の畜生！」と思つて、俺は傘を押しあげた。

こんな事で、此の土手に大分の時を費した。此の道を通つて、道が右に折れる處に第一の關所があつた。そこに人が一人ゐて、俺の背にはりつけてある紙に印をつけてくれた。「君はまだ小さいから、一箇所だけでいゝよ。今までので、大抵の奴は泣きだすのに、感心々々。」俺は、この位で降参するものかと、心の中で思つた。少し行くと、小川があつて、土橋がかゝつてゐる。そこを渡りきつた時、やさしい女の聲がした。

「三太郎や。」

俺はちよつと立止まつた。

「三太郎や。」

「俺はたしかに俺を呼ぶのだと思つたので、

「なんですか。」

と振りむいて、きいた。

「あは、子供は駄目だなあ、平氣で返事をしてらあ。」

橋の下から中學五年生が笑つた。俺をおどす積りだつたらしい。俺は**お袋**によばれた様に懐かしかつた。

もういゝから、先へおいで。」

俺は又てく〜とあるき出した。何も無い、只遠い山で狐の泣くのと、狐火の**明滅**するのを見ただけであつた。

程なく教へられた番所へ來た。提灯を二つとぼして、前に机を置いて、その机の上に居眠りをしてゐるのが**試膽者**だ。

暢氣なものだ、眠つてゐるわいと思つて、俺はその傍へ行つた

「印をつけて下さい。」

俺がかういつた時、その中學生は顔をあげた。俺は今度こそびつくりした。額の眞中から血が流れて、頸までも眞紅になつてゐるではないか。

「どうしたのですか、怪我したの。」

俺は餘りの事に聲を立て、聞いて見た。

「は、あ、子供にはかなはんなあ。君等をおどかすために、かうしてゐるのさ。」

「さう、私はほんたうの怪我だと思つちやつた。」

俺はそこで印をつけて貰つてから、今度は歸路についた。

これから森の中を通らなくてはならぬのだ。森は晝間でも氣味がわるい處であつた。そこを一人とぼくと通る時は、恐しくてたまらなかつた。

「ほうく。」

何だか變な鳥が鳴く。氣味がわるいと思つて行くと、人が二

人、暗闇の中で立話をしてゐる。

「お堂の庭の虎が此の森へ逃げて來たのだ。」



善光寺の御堂

お堂
善光寺の御堂

「何だかあそこに動いてるぢやないか。」

二人はしやがんで森の果を見てゐる。俺も此の虜には恐れ入つてしまつた。二三日前、お堂で虎を見て來たばかりである。あれが此の森に來られては、とてもたまらんと思つた。これから先、まだちよつと十間程行かなくては森を出られぬ。此の人たちと一緒にゐさへすれば、虎が來ても安心だと思つた。

「をぢさん、虎が見えますか。」

と俺はきいて見た。二人とも返事をしない。

「をぢさん。」

まだ黙つてゐる。俺は側へよつて行つた。そして、尙大聲

でいつた。

「をぢさん、虎が見えるの。」

餘り大聲だつたので、その一人が立つた、そして、俺の方を振りむかずに言つた。

「うん、今食ひに来るぞ。」

その聲をきいて、俺は可笑しくてたまらなくなつた。それは會長の西郷さんなのだ。

「あゝ、會長のをぢさんだ。」

俺はかういつて、會長に近づく。

「はあ、三太郎さんには試膽會も滅茶々々だ。一向恐しがらなくて駄目だ。子供は無邪氣でいゝ。」

西郷隆盛は俺の頭を二三度撫でてくれた。俺は會長につれられて裏門まで歸つた。俺は早速メダルを貰つた。今まで十歳で出場した者もなかつたし、十歳で試膽會のメダルを貰つた者もなかつた。が、その年かぎり小學生の参加は禁ぜられてしまつた。十歳以下では膽を試すほどの恐しさを理解せぬといふ理由であつた。(三太郎)

一一 童 心

北原白秋

越後の良寛禪師は童心の持主であつた。かういふお話がある。

一に童男童女、二に手毬、三におはじき、これが禪師の三好で

北原白秋
名は隆吉
詩人
明治十八年福岡
縣柳河町生
良寛禪師
今の新潟縣田雲
崎町生
歌僧
天保二年(三四七)
寂
年七十四

あつた。これで見ても、良寛様がどんなに子供が好きであり、又子供たちと遊ぶ事がどんなにうれしかつたかと思ひやられる。



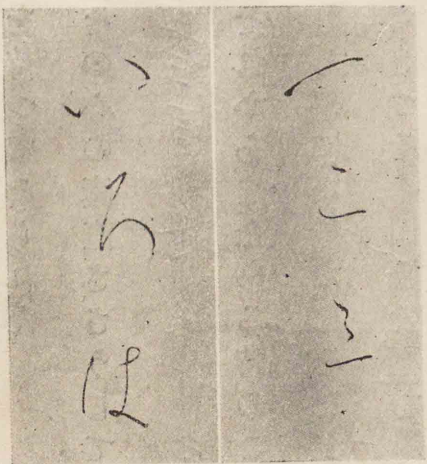
良寛

その良寛様も、子供たちには随分馬鹿にされて、盛になぶられたり、からかはれたりしたらしい。それにも

拘らず平氣で、一生懸命に遊び惚れてみた良寛様が有難い。

ある時、良寛様は例の通り、子供たちとかくれんぼをしてゐ

られた。鬼になつた良寛様が目を瞑つて、「もういゝよ」といふかはいゝ聲を一心に待受けてゐられる。と、丁度日のくれどきで、子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈



良寛筆蹟

がちらくと點き出すと、子供たちは急に遊びをやめて、一人残らず、こそくと歸つて了つた。そこは子供だから、良寛様も何もうつちやらかしてある。むろんいくら

待つても、いゝよ」といふものがない。そのうちに日が暮れ、長い夜が來た。さうしてたうとう夜が明けて了つた。良

寛様はそれでもまだ「一生懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿をしたまゝ、もういゝよ。」と子供が呼ぶのを待つてゐられた。

その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

春 夏 冬 二 升 五 合

それから、またある時のことである。良寛様が今度はかくれる事になつた。そこで、見つけられては大變だといふので、さつそく田圃の稻むらの中にもぐり込んで、それはかはいらしいことだ、それはくく小さくなつて、まるで二十日鼠見たやうに頭からすつぽりと稻藁をかぶつて、おどくくしてゐた。すると子供たちは、また例の通り一人のこらずこ

そこそと歸つて了つたのである。それを良寛様は少しも

御存じがない。また日が暮れて、夜が來て、また夜が明けた。稻むらには霜がまつしろに置き、朝の日のぼり始めると、百姓がやつて來て、何の氣もなく稻たばをやにははづして、「おやつ」と驚いた。見れば、こはそもいかに、良寛様が小さくなつてもぐつてゐられる。

「おや、良寛様が。」といふと、慌てゝ、靜かにしろ、靜かにしろ、子供が見つける。」

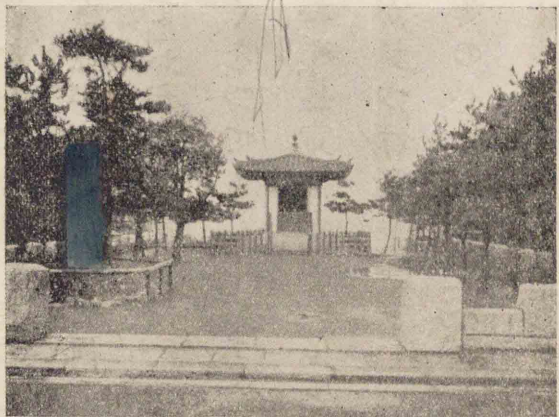
その心のあどけなさ、ありがたさ。まるで子供である。

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏といつた童のむかしそ

の儘である。それは何ものにも代へがたい、二つとない尊

い天稟である。

榮坊がまだ八歳か九歳の頃だ
つたといふ。ある日、父親から
ひどく叩かれたので、つい上目
をした。そこで、またく叩か
れた。「親を睨むやうな奴は鰈
になるぞ。」これを聞いた良寛
様の榮坊は外へ出て行つたが、
日が暮れても歸つて來ない。さあ、家内中大心配で、あちら
こちらと捜し索めると、或濱邊の岩の上に、悄然と佇んで沖



出雲崎町良寛堂

Handwritten notes in the top right corner of the page, including the name 'Shimizu' and some illegible characters.

の方ばかり眺めて居た。「榮坊、どうした」といふと、榮坊曰く、

「俺まだ鰈にならねいか。」鰈になるといはれたので、ほんた
うに鰈になると思つて、一心に海を見つめてふるへて居た
童心の正直さ、これをこそ生一本といふのであらう。

(洗心雑話)

一ニポチ

長谷川二葉亭

ポチは朝起きだ。僕の起きる時分には、もう疾うに朝飯も
済んで、ひとつきり遊んだ所だ。が、僕の聲を聞きつけると、
何處に居ても一目散に飛んでくる。
僕が急いで庭へおりる所を、ポチは透かさず泥足で飛びつ

長谷川二葉亭
本名は辰之助
文學者
新聞記者
舊尾州藩士
明治四十二年歿
年四十八

く。細い人參程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立て、嬉しさうに面を見上げる、見下す。目と目とひたりと合ふ。たまらなくなつて、僕が横抱きに抱く。ポチは抱かれながら身をもがいて、大暴れに暴れ、僕の手をなめ、胸をなめ、頤をなめ、頬をなめ、なめてもくくなめ足らないで、悪くすると、口までなめる。父が面をしかめて、汚いくと言ふ。なるほど考へて見れば汚いやうではあるけれども、しかし僕は嬉しい、止められない。

これが済むと、ポチもやつと氣が済んだといふ形で、また庭先をうろくしだして、縁の下などを覗いて見る。と、そこに草鞋蟲の一杯たかつた古草履の片足か何ぞがある。好

い物を見附けたと言ひさうな面をして、それをくはへ出して来て首を一つ掉ると、草履は横飛びにぼんと飛ぶ。透かさず追つかけて行つて、又くはへてぼんとはふる。そんなたわいもない事をして、活潑に元氣よく遊ぶ。

其の隙に僕は面を洗ふ、飯を食ふ。それが済むと、今度は學校へ行く段取になるのだが、此の時が一日中で一番僕の苦痛な時だ。ポチが跡を追ふ。うっかり出ようものなら何處迄も何處迄もついて来て、逐つたつてどうしたつて歸らない。こつそり出ようとしても、出掛ける時刻をちやんと知つてゐて、其の時分になると、何時の間にか玄關先へ廻つて待つてゐる。仕方がないから、しまひには取つつかまへ

て、否應なしに格子戸の内へ入れて置いては出るやうにし
てゐたが、さうすると、前足で格子を引搔いて、悲しいく、血
を吐きさうな啼聲を立て、跡を慕ふ。姿が見えなくなつ



長谷川二葉亭

ても啼止まない。僕もそれ
は同じ思だ。泣出しさうな
面をして、ばたくと駈出し、
聲の聞えない處まで来て、漸
くほつとして並の歩調にな
る、そしていつも心の中で、くりかへしくこんな事を思ふ。
「僕があないと寂しいもんだから、それであんなに跡を追
ふんだ、かはいさうだなあ。僕あ學校なんぞへ行きたく

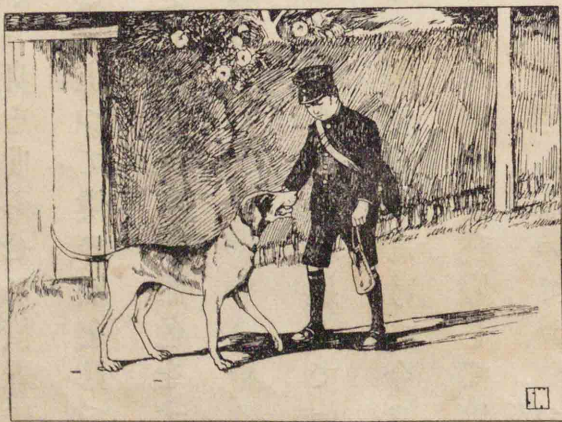
はないんだけれど……行かないとおとうさんがポチを
棄て、了ふつて言ふもんだから、それでしやうがないか
ら行くんだけれども……」

じゃんく」と放課の鐘が鳴る。今まで静かだつた校舎内
が俄かに騒がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後して、
あわたしくばつくと開く。と、その狭い口から眞黒な
塊がどつと廊下へ吐きだされ、崩れてばらくの子供にな
り、我勝ちに玄關脇の昇降口を目がけて駈出しながら、口々
に何だかわめく。只もう校舎をゆすつて、わあといふ聲の
中に、無数の圓い顔が黙つて大きな口をあいて躍つてゐる

やうで、何をわめいてゐるのか分らない。で、それが一旦昇
降口へ吸込まれて、此處で又ごたくと入りみだれ重なり
合つて、腋の下から才槌頭がひよつと出たり、反齒へ肱がぶ
つかつたり、靴の踵が生憎と霜焼の足を踏んだりして、上を
下へとこね返した擧句に、わつと門外へ押出して、東西へち
りぢりになる。仲好し二人肩へ手を掛合つて行く前に、辨
當箱をぼんと抛り上げては、ちよいと受けて行くいたづら
ものがある。其の隣は往來の石ころを蹴飛ばし〜行く。
誰だかあとで遊びに行くよ。とわめく。「蝗を取りに行かな
いか」といふ聲もする。友だちが皆道草を喰つてゐる中を、
僕一人は駈抜けるやうにして、脇見もせず、せつせと歸つ

て来る。

家の横町の角まで来て、くすぐつたいやうな心持になつて、
そつと其の方角を見る。果してポチが門前へ迎へに出てゐ
る。僕を見附けるや否や、逸散
に飛んで来て飛附く、なめる。
何だか「兄さん」と言はれたやう
な氣がする。若し本包と辨當
箱と草履袋で両手が塞がつて
ゐなかつたら、僕は此の時ポチ
を捉まへて、どうしたか分らないが、それが有るばかりに、ど



（筆也審部渡）チ ポ

うする事も出来ない。據なく頭を撫でてやるだけで、不承不承また歩き出す。と、ポチも忽ち身を曲らせて、横飛にひよいと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて僕の顔を見て、おどけた眼色をする。追附くと、又逃げて、又其の眼色をする。かうしてふざけながら一緒に歸る。

玄關から大きな聲で「只今」といひながら内へ駈込んで、いきなり本包を其處に抛り出し、慌て、辨當箱をあけて、今日のお菜の残りと稱して、實はたべたかつたのを我慢して半分残して來たのをポチにやる。それも足りないで、おやつにお煎を三枚貰つたのを、せびつて五枚にして貰つて、二枚は食べて、三枚は又ポチにやる。それから庭で一しきりポチ

と遊ぶと、母がきつと「おさらひをおし」と言ふ。おさらひは厭だけれども、これをしないと、すぐポチを棄てると言はれるのがつらいので、澁々内へ入つて形の如く本を取出し、少しばかりおんによこによこことやる。それでおしまひだ。「餘り早いね」と母が言ふのを空耳潰して、つと外へ出て、「ポチ來い、ポチ來い」と呼びながら近くの原へ一緒に遊びに行く。これが僕の日課で、ポチでなければ、夜も日も明けないのであつた。(平凡)

一三 猫と鳥

夏目漱石

吾が輩は近頃運動を始めた。如何なる種類の運動かと不

夏目漱石
名は金之助
文學者
江戸生
大正五年歿
年五十

ボール
Bat

審を抱く者があるかも知れないから、一寸説明しよう。吾が輩は不幸にして器械を持つことが出来ない。だからボールもバットも取扱ふことが出来ない。次には金がないから買ふ譯に行かない。此の二つの理由からして、吾が輩の選んだ運動は、一文入らず器械なしと名づくべき種類に屬するものと思ふ。

主人の庭は竹垣を以て四角にしきられてゐる。縁側と平行してゐる一邊は八九間もあらう。左右は雙方とも四間に過ぎぬ。吾が輩の始めた運動は、垣巡りといつて、此の垣の上を落ちない様に一周するのである。是はやり損ふこともまゝあるが、首尾よく行くと御慰になる。ことに處々

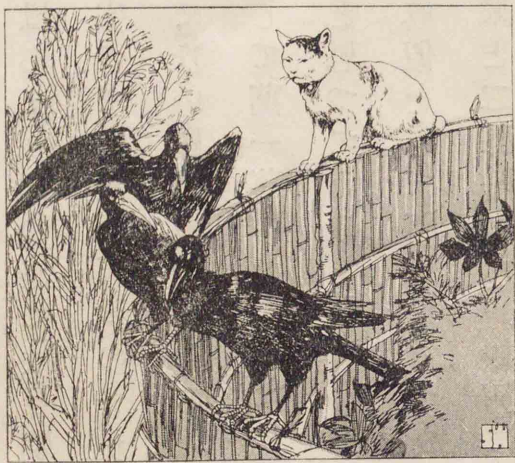
に根を焼いた丸太が立つてゐるから、一寸休息に便宜がある。今日は出来がよかつたので朝から晝までに三遍やつて見たが、やるたびにうまくなる。うまくなるたびに面白くなる。たうとう四遍繰返したが、四遍目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ばかり向ふに列を正してとまつた。

「是は雅參な奴だ、人の運動の妨をする。ことに何處の鳥だか籍もない分際で、人の堀へとまるといふ法があるものか。」と思つたから、通るんだ、おい退き給へ。」と聲をかけた。眞先の鳥は此方を見てにや／＼笑つてゐる。次のは主人の庭を眺めてゐる。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いてゐる。何

か食つて來たに違ない。吾が輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つてゐた。鳥は通稱を勘左衛門といふさうだが、成程勘左衛門だ。吾が輩がいくら待つてゐても、挨拶もしなければ飛びもしない。吾が輩は仕方がないから、そろ／＼歩き出した。すると、眞先の勘左衛門がちよいと羽をひろげた。やつと吾が輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向きから左向きに姿勢を更へただけである。

此の奴め、地面の上なら其の分に捨置くのではないが、如何にせん、只さへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしてゐる餘裕がない。といつて、また立ちどまつて三羽が立

退くのを待つのもいやだ。第一さう待つてゐては足がつかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな處へ



猫と鳥 (筆也審部渡)

はとまりつけてゐる。従つて、氣に入ればいつまでも逗留するだらう。こつちは是で四遍目だ。只さへ大分勞れてゐる。況や綱渡にも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障碍物がなくて

さへ落ちんとは保證が出来んのに、こんな黒装束が三個も前途を遮つては容易ならざる不都合だ。愈となれば自ら

運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさうしようか。敵は大勢の事ではあるし、ことにはあまり此の邊には見馴れぬ大體である。口嘴がおつに尖つて、何だか天狗のまうし子の様だ。どうせ質のいゝ奴でないには極つてゐる。退却が安全だらう、餘り深入りをして萬一落ちでもしたら、尙更恥辱だ。と思つてゐると、左向けをした烏が阿呆と言つた。次のも眞似をして阿呆と言つた。最後の奴は御丁寧にも阿呆阿呆と二聲叫んだ。如何に濃厚なる吾が輩でも、是は看過出來ない。第一、自己の邸内で烏輩に侮辱されたとあつては、吾が輩の名前にかゝはる。名前はまだないからかゝはり

やうがなからうといふなら、體面にかゝはる。決して退却は出來ない。諺にも烏合の衆といふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。「進めるだけ進め。」と度胸を据ゑて、そのそ歩き出す。烏は知らん顔して、何か御互に話をしてゐる様子だ。愈癩癩に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目に合はせてやるんだが、残念な事には、いくら怒つても、そのくししかあるかれない。漸くの事、先鋒を去ること約五六寸の距離まで來て、もう一息だと思ふと、勘左衛門は申しあはせた様にいきなり羽搏きをして、一二尺飛上つた。其の風が突然吾が輩の顔を吹いた時、はつと思つたら、つい踏みはづして、すたとんと落ちた。

これはしくじつたと、垣根の下から見上げると、三羽とも元の處にとまつて、上から嘴を揃へて、吾が輩の顔を見おろしてゐる。**圖**太い奴だ。睨みつけてやつたが、一向利かない。背を圓くして少々唸つたが、益、駄目だ。俗人に**靈妙**なる詩の意味が分らぬ如く、吾が輩が彼等に向つて示す怒の**記號**も何等の**反應**を呈しない。考へて見ると無理のない所だ。吾が輩は今まで彼等を猫として取扱つてゐた。それが悪い。猫なら此の位やれば慥かにこたへるのだが、生憎相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば、致し方がない。機を見るに敏なる吾が輩は、到底駄目と見て取つたから、**綺**麗さつぱりと縁側へ引上げた。(吾輩は猫である)

一四 夏休み

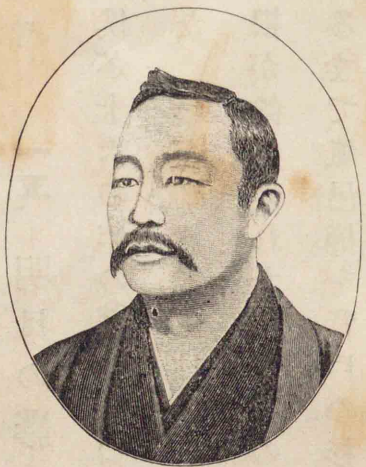
幸田露伴

幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士
慶應三年江戸生

楽しき夏休みは來れり。行李の紐は既に締めて、俥だに來らば今にも家に歸り得る程に用意は整ひぬ。楽しきは夏休みにこそ。父母は指折りて待ち給はん、兄弟姉妹は日を數へて待ち居りなん。今日の樂みは、今年の樂みの大なるものゝ一つなり。歸らん。飛ぶが如くに歸らん。野越え、山越え、はた海を越えて歸らん。歸りて、父母の家に、心緩やかにして夏を過さん。休むが爲の夏休みなれば、心落着けて大いに休み、さて來ん秋の九月に入りて、勵み勉むべき精力を蓄へん。

南風快く吹き、烈日盛に照りて、天地の間生氣横溢す。されば、千草萬木皆おのゝ勢づきて榮え誇るのみならず、鳥の聲は曉にいさみ、蟲の翅は夕にきほひ、魚も溯り躍れば、貝も繁殖す。人も春より此の季に互りては、面の色も冴え、身の力も張り、鍛鍊を加ふれば、肉體は發達し易き傾あり。思へば、夏の天地はまことに壯快なり。梢を渡る旦の風空に峙つ雲の峰、さては天の鼓の轟き循つて雷雨の沛然として至るなど、いづれかをかしからざらん。緑陰に書を讀めば、翠光詩趣と共に胸に沁み、小樓に箏を弾きやめば、檐の風鈴も清き音を和す。いと暑くて苦しき日も、一庭の穢を掃つて、打水に夕の涼しさを招き、浴後を團扇片手にそゝるあ

るきしたるなど、その楽しさは、冬はもとより、秋にも亦味はふべからざるものあり。



幸田んど清らに掃ひ拭き、汚れぬ衣着て、煩はしからぬ心持ちたら
露伴んには、夏はまことに好き時節
なるべし。暑し、苦しとのみ口

癖に言ひて、我が務を怠り、或は晝寢に身を倦ませ、朝寢に心を荒ませては、夏ほど苦しき時はなかるべし。休み慰めんがための夏休みなれども、意味なき怠に快からず長き日を

暮さんは惜しむべし。思へ、夏休みの四十日、またこれ我らが生涯の一部なるを。

三換

一五 明月の影

僕が十六の年の夏であつた。休暇になると直ぐに歸省した。僕が歸る二三日前から、田舎の僕の家では風呂場の屋根が餘り破れたので、その葺換（葺換）を始めた。屋根の出來あがるまで、風呂桶を背戸の杉森のほとりに持出して湯を立ててゐた。僕が何日の夕方歸るといふ葉書を出して置いたので、母は東隣の與太公を頼んで風呂をたて、待つてゐてくれた。

Cosmos
コスモス

夕方無事に家に着いた。父母は大喜びで僕を迎へてくれた。僕は靴や風呂敷包を戸棚の前に投出して、母に導かれて杉森の邊の風呂場へ行つた。三年振りで歸省したせゐか、庭の柿の木や、桐の木や、兄と一緒に植ゑた栗や、妹と其の下で遊んだ葡萄棚や、お稻荷様の側の紫陽花や、父が仕立てたといふコスモスや、有つたものは生長し、無かつたものはふえて、まるで僕の家（僕の家）の庭とは思はれない程に様子が變つてゐる。淡青い夕餉の煙が緩くたなびいてゐる。向ふに村長（村長）の家の燈火が一つ見える。與太公の家の馬が嘶く聲も聞える。風呂桶の蓋を取つて入らうとした。濛々とあがる湯氣（湯氣）の



五 五

中に玉のやうな月影が靜かに沈んでゐた。仰げば十五夜の月（五）は天に懸つて、杉森をも、我が家をも、風呂桶をも、僕の身體をも白く照してゐる。

僕は月の住んでゐる風呂桶にはどうしても入ることが出来な^いで、しばらくそれに見惚れてゐた。やがて靜かに手を入れると、眞圓な月影が波のためにさらさら（六）と崩れる。形がなくなる。又しばらくすると、湯の面が平らになるにつれて、もとの通り玉のやうになる。此の時僕は實に繪にもかけぬ美に打たれた。思ひきつて此の明月の影を二つに割つて、月と共に一つ湯に入つた。月は大空に光を放つて笑つてゐる。

白い月の光を浴びて靜かに湯の中に冥想してゐると、杉森の叢にすだく蟲の音が實に面白い。體を洗はうとして手拭を動かすと、其の音と共に蟲の音がはたと鳴き止む。が、靜かに體を湯の中に沈めてゐると、やがてまた涼しい蟲の音がまるで銀の鈴を振るやうに聞えて来る。僕は此の時、はじめて、

行水の捨てどころなし、蟲の聲。

といふ句の味ひを悟つた。

間もなく母が手拭を冠つて野良仕事の支度のまゝ來られた。久し振だからといつて背中を流して下さつた。母は僕の背中を流しながら、遼陽で戦死した兄の事などを語ら

行水の
伊丹鬼貫の句
遼陽
支那滿洲盛京省
にある
明治三十七年八月二十三日から九月三日までかかつて我が軍はロシア軍を攻撃して遼陽を占領した

れて、たつた一人の僕の成功を急がれた。
あゝ僕の母も父も、はや五十の坂を越してゐる。僕は熱い
涙をおとした。

天を仰げば、明月は老いたる母と、瘦せたる僕とを靜かに照
してゐる。

蟲は鳴き止んで、杉森はしんくとしてゐる。

風呂の中には、月がまだ玉の様な影を沈めてゐる。

僕は其の後何處で月を見ても、何時月を見ても、此の夜の月
を思ひ出さぬことはない。(作文三十三講)

萩原井泉水

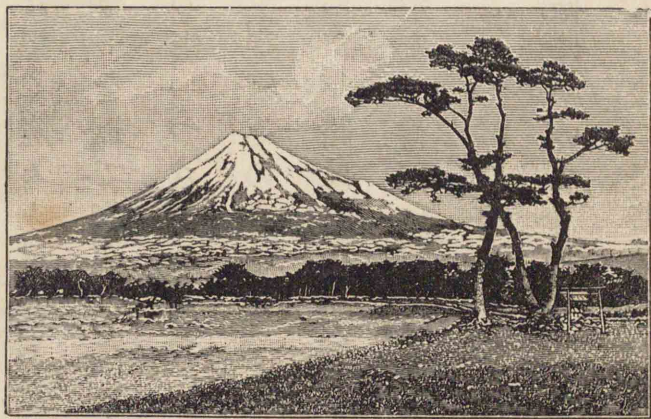
名は藤吉
俳人
明治十七年東京
市生

一六 富士登山

萩原井泉水

お山は實に鮮かに晴れてゐた。夕陽の色どりを失つて、た
だ黒く隆々と盛りあがつた偉大な土の塊が、却て彫刻的な
尊嚴を以て仰がれた。空は硝子のやうに透明で、ちぎれ雲
の影一つさへなかつた。晝の光が消失キエせたにもかゝはら
ず、空氣そのものが光を持つてゐるやうに、薄青く暮れずに
ゐた。路はお山へ向けて眞直についてゐた。馬は慣れた
道を心得顔に、自分の好きな步調で私たちを運んでゐた。
こゝらの裾野は小松が多かつた。小松の中には秋草が様
様に咲いてゐるらしいが、丈の低いのは皆夕の色に埋もれ
てしまつて、背の高い女郎花と、路傍に近く咲いてゐる月見
草とだけが暮残つてゐた。ふと西の空を見ると、今しも現

れた明星がたつた一つ、ばつちりと光つてゐた。それは此



富士の裾野

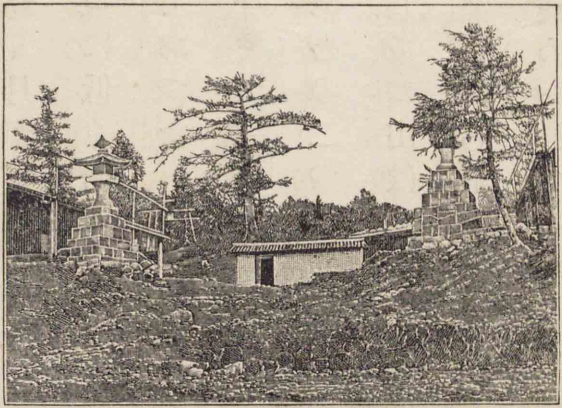
しに涙ぐましいほど美しく寂しい感激が、心にこみあげて

の限りもない野の廣さを支配する神の灯かとも見えた。又此の山の静ながらの尊さを私たちに暗示する表象かとも思はれた。私は、だんくと薄れる靄に包まれてゆくやうなあたりの景色を馬上から眺め、やがて眼をうつして明星に見入った。そのとき、何といふ事な

來るのを覺えた。

「お、月が……私は覺えず馬上でかう叫んだ。それは、東の空に低く研ぎすまされた、まん圓い月が、玲瓏と搖ぎ出た所であつた。月が出ると共に景色の調子はすべて一變した。今まで一様に薄青かつた空や裾野はくつきりとして、光と影との二つに分れた。空は朗々とした光澤を帯びた。そしてお山はいよゝゝ黒く大きな姿を以て出現した。その半腹から上の方には、小さな寶石のやうな灯が點々として鏤められてゐた。それは石室の灯であつた。路の上にも白い光が流れて來た。そして私たちの七頭の馬が長い黒

い影を投げはじめた。



馬返し (口田吉)

馬返しの茶屋に着いた時は夜
 氣を感じる程だった。「これか
 ら山も高くなるし、夜も更ける
 から」と強力がいふので、私たち
 はメリヤスの肌着を着込んだ。
 櫓の明りの暗い手元で、饅頭を
 一杯づつ食べた。そして又め
 いめいの馬に乗った。「今夜の
 お山はいゝぞ。」こんな日和は今年になつて初めてだ。――
 馬子と茶屋の主人とが、かう話してゐた。

一合目から上は樹の茂りがある。月は大分高くなつたら
 しいが、枝がこんもりとかぶさつてゐるので、路は暗かつた。
 先に立つて行く馬子が一人、提灯をつけて馬を導いて行く。
 後の馬はたゞ先の馬に續いて、暗い中を進むのであつた。
 勾配もだん／＼急になつた。それに岩や石が多いと見え
 て、馬の蹄の音がかつ／＼と鋭く鳴つて來た。暗さの爲か、
 急な上りの爲か、馬は時々躓いた。さういふ時には蹄鐵か
 ら火花が飛散つた。しかし、樹の枝の薄くなつてゐる所
 は、月の光が雪のやうに葉の上にかゞやいて、そこらを明る
 くした。又ふと茂みのとだえてゐる處では、月の光が瀧の
 やうになだれ落ちて、路の上に溢れてゐた。さういふ處を

馬は勇ましく歩を運んだ。

三合目、四合目の室はもう戸を閉ぢてゐる。その前をひつそりと乗りながら過ぎた。五合目に着くと馬は心得たやうに、ぴたりと止まつた。樹帯はこゝらで全く盡きて、月はお山一面に照つてゐた。私たちは馬を下りた。馬はしつとりと汗ばんで、水を浴びたやうに濡れた肌を月にさらしながら、おとなしく足を揃へてゐた。私たちはその室にはひつて、熱い茶をうまく味はつた。



三合目か望らだん頂上

そして用意して来た夕食の辨當を開いた。室には宿泊してゐる人が蒲團一枚をひつかけて、ごろ〜と寝てゐた。

五合目は「天地之境」と稱せられてゐる。如何にも、此のあたりまで登ると、地上を離れたといふ感じがする。吉田口から裾野を來る時、薄い夕霧がしつとりと襲うて來るやうに思つたが、それはもやく〜とした白い雲となつて、こゝから見ると、低く裾野一面を蔽うてゐる。そのあなたに、吉田の町の灯がちら〜と光つてゐる。それよりも尙遠く、尙幽かに見えるのが船津の灯であつた。

馬と馬子とを返してから、私たちは強力を先に立て、靜か

吉田口

山梨縣南都留郡
福地村上吉田
富士山東北麓の
登山口

船津

山梨縣南都留郡
船津村
富士山の北麓
河口湖畔にある

に靜かに一歩々々と踏んで登つた。この夜ふけの山を踏んでゐるものとしては、實に私たちだけであつた。鳥もゐず、蟲もゐず、死のやうな靜寂の中に、七人の金剛杖の音のみが、かちりくくと岩にあたつて鳴つた。その杖は五合目の室で「天地之境」といふ焼印を押してくれたものだつた。月はまことによく冴えて、何の遮るものもない山の肌は、晝のやうに明るかつた。時計を出して見ると、十時を二十三分過ぎてゐるその針が、はつきりと月光に讀まれた。

自分の服にさはつて見ると、露でしつとりとしめつてゐた。塵や笠は暑さを凌ぐために身につけて來たのだが、それが

濱梨

一に岩梨
富士や日光などの高山に地を這つて生えてゐる葉は楕圓形、實は大豆の大きさに甘酸ばい

ベンチ

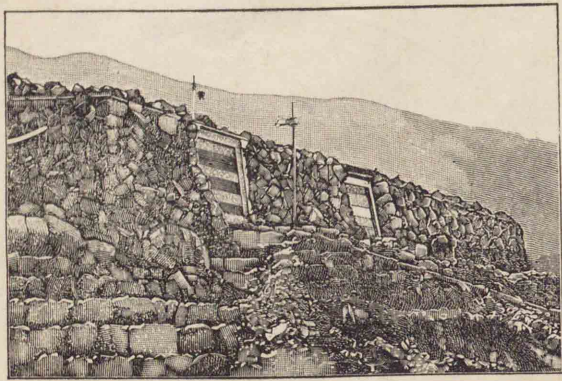
Bench 腰掛
精進の宿
山梨縣西八代郡精進村なる精進湖畔の宿

今では露を凌ぐ爲のものとなつた。山肌の岩や砂にすがつて生えてゐる僅かの青いもの——偃松や濱梨の木や蕪など——の葉にも露が光つてゐた。空を見ると疎らな星が、大きな露の雫のやうにきら／＼してゐた。さうした星が、ふつと流れて下界の方へ落ちたりした。こゝから見ると、白い雲が海のやうに浪立つ下界の方へ——。

六合目の室はびつたり閉ぢてゐたが、その前に差掛けのベンチが出來てゐる。そこへ腰をかけて休んだ。私は精進の宿を立つ時新しく替へて來た草鞋を踏切つたので、強力しんぢりの背から一足取出させて穿きかへた。室の戸が明いて、こ

ここに泊つてゐた男が出て來た。その男は崖の所へ行つて、ちらとあたりを見まはして、ぶる／＼と身慄ひをして、「おい、月だな。」といひつゝ、又室の戸をびつたりと締めた。

頂に近くなると共に、路といふやうな路は無くなつてしまつた。人が踏んだあとの砂で、僅かにそれと知られるけれども、踏みかためられてはゐないから、足をかけると、さくりさくりと這つて、歩みは著しくはかどらなくなつた。「懺悔懺悔——六根清淨——」登山の行者が唱へる此の言葉を、先へ行く者と後になつた者とが、お互に唱へかはして、心を引きしめあつたりした。

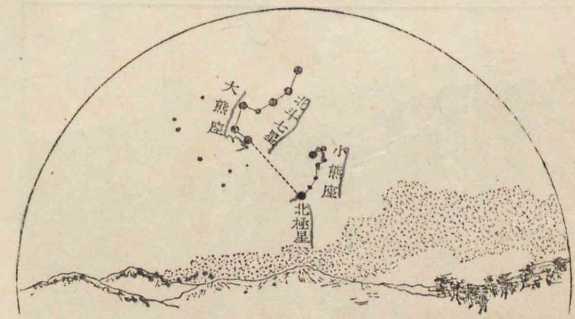


八合目の石の室

七合目を越して、八合目の室に入つて少し休んだ。時計を見ると、もう一時を過ぎてゐた。非常に睡いやうでもあつたが、ここでなまじひに眠つてはいかぬと思つた。室の中の爐では木の枝を焚いてゐた。その烟が非常にけむくて、目から涙がぼろ／＼と落ちた。やはり目が疲れてゐる爲だと思つた。室の一隅に幕を引いて、別室のやうに仕切つて泊つてゐた外人の一群は

もう起きてゐた。頂上で御來迎を拜まうとするならば、そ

ろそろこゝを出なければならぬ頃だ。いつか爐の傍に横になつて眠つてしまつてゐた強力の青年を呼起して、私たちは又登り始めた。



北 斗 七 星

山に酔つたといふよりも、睡眠を奪はれたためであらう、頭がふらふらする。さういふ者が私の外に一人二人あつた。自分は塵を山の勾配のまゝに砂の上に敷いて、ごろりと寝て見た。砂の上には草一本の影もない。月

はちやうど額の上に懸つて、いよゝ天心に澄切つてゐる。頭をずつと仰向けにした視線のはてに、北斗七星がきらきらと光つてゐる。私は其の一つをじつと見つめてゐた。と、其の星がふらふらと動き始める、すうと流れるのではなく、小さな螺旋を描きながら踊つてゐる。不思議だなと思つて、他の一つの星を見つめた。すると、其の星も亦螢のやうにゆらゆらと舞ひ始めた。これは幻覺だ。さう思ふと、眼の疲労の甚だしい事がわかつた。また月を見た。月の光がまぶし過ぎて、涙がにじみ出した。

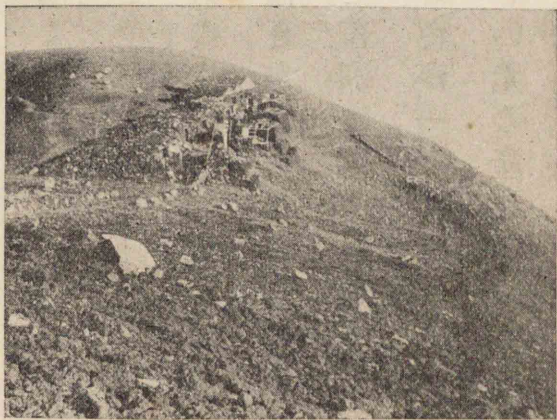
九合目には久須志神社といふお宮がある。そこへはひつ

て暫く休んだ。神官が二三人、なか／＼寒い。併し今朝は氷が張らないから。――などと、もう朝の言葉をかはしてゐた。さうして私たちには、「こゝは日の御子といつて、東へ眞正面の所です。こちらで御來迎をお拜みなさい。」といつたが、日の出までにはまだ二時間近くも間があるので、私たちは頂上を指すことにした。「頂上へ行く方は御祓をしていらつしやい。」神官はかういつて祝詞を讀んだ。それは、この佳き日にお山へ詣でるよき人々の一族の平安を祈るといふ意味を、神代の言葉を長々しく集めて綴つたものであつた。そして、大きな御幣で、皆の並べた頭の上をばさりばさりとはらつた。外へ出ると、これまで感じなかつた風が

冷え／＼と動いてゐた。それが黎明の近いことを思はせた。又その風が、ふらく／＼した頭を幾分かしつかりとさせてくれた。

月の光は、漸く衰へ始めた。その上、路が東へ廻つた爲、西へ傾きかけた月が、頂の峯の陰になつてしまつた。光と影との差別は薄らいで、裾野の夕に見たやうな混沌とした青白い色が、一様に漂うて來た。その混沌たるものゝ中から、新しい光の産れるのを待つばかりになつた。下界は――殊に甲州に寄つた方は――雲がびつしりと鎖してゐた。その雲のはづれに、今までは雲と同じやうに白く見えてゐた

山中湖
 山梨縣都留郡吉田の東南二里山中村にある
 五湖
 本酒湖
 精進湖
 西湖
 河口湖
 山中湖



(頂山士富)社神志須久

ものが、大きな勾玉の形をした湖水であるといふけぢめも、やつと明かに認められた。それが山中湖であつた。五湖の一として見残したこの湖を、私たちはかうして鳥瞰的に眺め得たのであつた。

頂上の室ではもう灯を消してゐたが、屋根の下はうす暗かつた。そこへ私たちは上つて、御來迎を待つことにした。じつとしてみると、寒さはひし〜と身に迫つて来る。手は凍え、吐く息は白く見え

た。襦袍じゆぽうを借りてかぶる者もあつた。下の室を早く立つて來たと見える人がちらほらと登つて來て、室はいつか一杯になつてしまつた。皆草鞋のまゝで上るのだが、脚と脚とを入れちがへて餘地もないやうな所へ牡丹餅の箱などが並べられた。名物といふ眞黒な甘酒だけは、うまかつた。

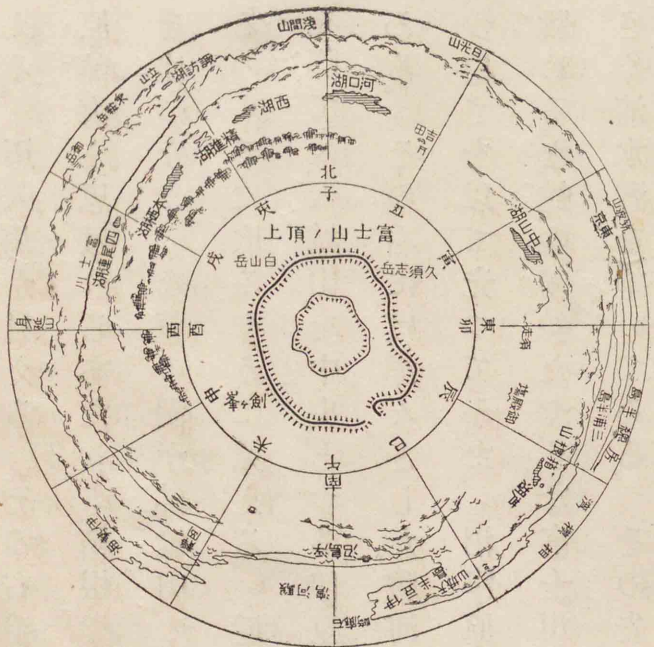
曉紅——朝の始まる前の先觸せんしゆくとして、かんがりとぼかし染にせられる地平線の赤さは、かうした高みから眺める時には、たゞに美しいばかりでなく、地上の物の一切の希望を語つてゐるやうな純潔な尊たかさに、にじみ出てゐる。「あゝ、ぢきに御來迎だ。」さういふ言葉が口々に傳へられて、室の中に

あ
 と

みた者も皆外に出た。大分明るくなつた岩の上には、霜が
 おいてみた。それを踏んで、寒さうな緊張した顔が並んだ。
 地平線の赤さは、うつすりと吸取られて、ある神聖なもの、
誕生をつゝんでゐる幕のやうな霞が、つやくししい光を帯
 びて來た。——つと、一點輝いた朱の色が、鋭い刃で突き破
 つた皮膚から滴る血のやうに霞の幕を押分けたと思ふ間
 に、その朱の一點が見る／＼擴がつて、麗しい太陽の姿とな
 つた。刹那、新しい光線は地上に、又天上に漲つて來た。そ
 の第一の光線は、まつしぐらに、この頂上に立並んでゐる私
 たちの瞳に届いた。
 朗かな朝は來た。大空は實によく晴れてゐた。大地も實

によく晴れてゐた。太陽を生んだ後の霞が消えた所に烟

の靡くやうに灰か
 に這つてゐるのは
 房總半島である。
 海は空と差別がな
 いが雲のやうに置
 かれた大島が、そこ
 は太平洋の中だと
 いふ事を示してゐ
 た。その手前に更



(圖製至中野) マラノバ山士富

大島
 伊豆半島の東方
 海中にある島

三浦半島
 神奈川県東南
 方に突出てゐる
 半島

に鮮かに一抹の線を引いてゐるのが三浦半島である。海

江の島

神奈川県の南方
鎌倉の西にある

小島

馬入川

甲斐國桂川の下
流

相模國を貫流し
て相模灘に入る

大磯

神奈川県中郡大
磯町

愛鷹山

富士山の南麓に
峙つ山

駿東富士の兩郡
に跨つてゐる

天城山

伊豆半島の中央
部に峙つ山

御前崎

静岡県で駿河灣
の西南に突き出
た岬

岸線に沿うて目を移すと、小さく、しかも靜かに江の島が見える。馬入川が見える。その右手は大磯であらう。小田原、熱海と思はれるあたりも、箱根や足柄の山々も盤に水銀を盛つたやうな蘆の湖が外輪山の墨の中に秘められてゐるのも、手に取るやうに見える。近くは愛鷹山の青い隆起を隔て、天城山を中央とする伊豆半島が、ずうつと延びてゐる。その右には洋々とした駿河灣が描き残された素絹の白さを以て光つてゐた。沼津、原田子の浦と順々に南を眺めると、蛇の匍つたやうな富士川を越えて、三保の岬が小さく清水灣を抱いてゐる。その先に突出してゐるのは御前崎であらうが、そこらはもう霞んでゐる。私は此の大き

なパノラマのやうな景觀に心を放つてゐた。

太陽はずん／＼と高く昇つて、強い、とろ／＼とした光線が、靈山の絶頂から下界へ向けて擴がつていつた。(山水巡禮)

一七 月見草

阿部次郎

阿部次郎

哲學者

東北大學教授

文學博士

明治十六年山形

縣生

一昨々年

大正七年

輕井澤

長野縣北佐久郡

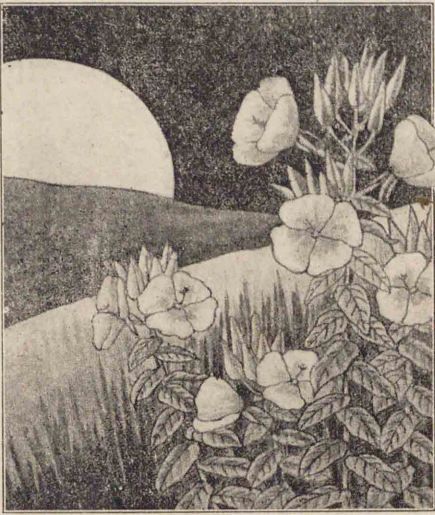
東長倉村の大字

淺間山の南麓

作者が避暑して

ゐた地

月見草は私の好きな花の一つである。とりはなして言へば、黄色は自分の特に好きな色の部類に屬してゐるものではないが、あの花瓣の柔かさと、あの清新な鮮かさと、又その花の咲く夕暮や曉のすが／＼しさとは、月見草のほのかな黄色をこよなくなつかしいものに思はせるのである。自分は一昨々年の夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れる



月見草

ことが出来ない。朝まだ暗いうちに、狭苦しく満員になつてゐる停車場前の旅舎を出て、同宿のT君やM君と新舊兩市街の間の野原を歩いた。月見草が曉に近く、幾らか萎れかゝつて限もなく咲續いてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分たちは言葉少なに並んで歩きながら何とも言へず親しい氣持になつて、又旅舎に歸つた。

今自分の家にも一株の月見草がある。二三日前の夕暮、私は月見草の咲くところを眼のあたり見た。二階の欄干に

凭つて食後の煙草をふかしてゐると、庭の月見草の蕾が急にふくらんで來るのが見えるやうに思はれた。昔の人が蓮の花の開く音をきいて悟をひらいたといふ話をかすかに想ひ起しながら、いそいで庭に出て、月見草の傍にしゃがんで見てゐると、如何にも今咲きかけてゐる蕾の幾つかもある。最初に花瓣を包んでゐる萼が後退りを始める。萼が開くと、卷かれてゐた花瓣が次第にふくらんで來て、不意に一ひらが急にはじける。さうすると、四つの花びらが一緒にふわりと開いて來て、遂に蕊を見せて咲いてしまふのである。その咲きはじめに、ほのかな香氣が鮮かに鼻を撲つときの氣持はなんとも言はれない。明日の朝になれば

凋んでしまふ果敢ない花ではあるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知れない。
私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても、固より悟は開けない。併し悟が開けなくとも、新しく咲く花を見まもる静かな愛の心は、本當にありがたいものであつた。

(北郊雜記)

吉村冬彦

本名寺田寅彦
物理學者
理學博士
東京帝國大學教授
明治十一年高知縣生

一八 凌霄花

吉村冬彦

小學時代に一番嫌ひな學科は算術であつた。いつでも算術の點數が悪いので、兩親は心配して、中學の先生を頼んで、夏休中は先生の宅へ習ひに往く事になつた。先生の處

までは四五町もある。宅の裏門を出て、小川に沿うて少し行くと、村外れへ出る。そこから先生の家の高い松が、近邊の藁屋根の植込の上に聳えて見える。これに、凌霄花が下

から隙間もなく絡んでゐる。

毎日晝前に母から注意されて、いや／＼ながら出て行く。裏の小川には、美しい藻が澄んだ水底にうねりを打つて揺れて



凌霄花

ある。其の間を、小鮒の群が白い腹を光らせて時々通る。子供等が丸裸の背や胸に泥を塗つて小川へ入つて、ぼちやぼちややつてゐる。附木の水車を仕掛けてゐるのもあれ

ば、盃船に乗つて流れて行くのもある。自分は羨ましい心を抑へて、川ぞひの岸の草をむしりながら、石盤を抱へて先生の家へ急ぐ。寒竹の生籬を繞らした冠木門をはひると、玄關の脇の坪には、蓆を敷き並べた上によく繭が干してあつた。

玄關から案内を乞ふと、色の黒い奥さんが出て来て、「暑いによう御精が出ますねえ。」といつて座敷へ導く。綺麗に掃除の届いた庭に臨んだ縁側近く、低い机を出してくれる。先生が出て来て、黙つて床の間の本棚から算術の例題集を出してくれる。横に長い黄表紙で、木版刷の古い本であつた。「甲乙二人の旅人あり、甲は一時間一里を歩み、乙は一里

半を歩む。」といつた様な題を讀んで、其の意味を講義して聞かせて、「これをやつて御覽。」といはれる。先生は縁側へ出て欠あひらをしたり、勝手の方へ行つて大きな聲で奥さんと話をしたりしてゐる。自分は其の問題を前に置いて、石盤の上で石筆をこつ／＼いはせて考へる。座敷の縁側の軒下に投網が吊りさげてあつて、長押の様なものに釣竿が澤山掛つてある。何時間で乙の旅人が甲の旅人に追ひ着くかといふ事がどうしても分らぬ。考へてみると頭が熱くなる。汗が坐つてゐる脚ににじみ出て、着物のひつつくのが心持が悪い。頭を抑へて庭を見ると、笠松の高い幹には眞赤な凌霄花の花が熱さうに咲いてゐる。よい時分先生が出て

来て、「どうだ、むづかしいか、どれ」といつて自分の前へ坐る。羅紗切れを丸めた石盤拭きで隅から隅まで一度拭いて、そろそろ丁寧テイネンに説明してくれる。時々「分つたか、く」と念を押して聞かれるが、大方それがよく分らぬので、妙に悲しかつた。俯向フウカウいてみると、水漬ミヅヅクが自然に垂れかゝつて来る。それをじつと堪へてゐる。愈ユ落ちさうになると、思ひ切つて啜クり上げる。これもつらかつた。晝飯時チウハンジが近くなるので、勝手の方では皿や鉢などの音がしたり、物を焼く匂がしたりする。腹の減るのもつらかつた。繰返して教へてくられても、結局は餘りよく分らぬと見ると、先生も悲しさうな聲を少し高くする事があつた。それが又妙に悲しかつた。

「もうよろしい、又明日おいで。」と言はれると、一日の務がともかくもすんだやうな氣がして、大急ぎで歸つて來た。宅では何も知らぬ母が色々涼しい御馳走を拵へて待つて居て、汗だらけの顔を冷水で清めると、優しい言葉をかけられるのが、又妙に悲しかつた。(藪柑子集)

一九 ツェツペリン伯號に乗りて

圓地與四松

ツェツペリン伯號
Graf Zeppelin
圓地與四松
東京日日新聞記者
十九日
昭和四年八月
霞ヶ浦
茨城縣常陸の南部にある我が國第二の太湖湖畔の西岸に海軍航空研究部及び航空隊がある

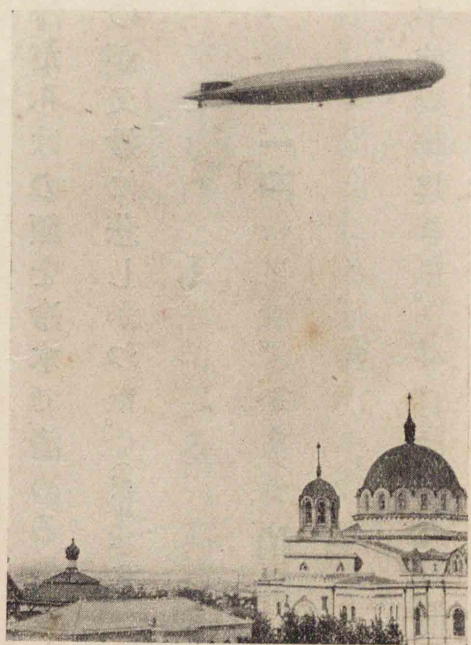
午前六時起きる。今日は十九日、霞ヶ浦着陸の日である。少し靄カミがかゝつてゐたが、やがてすつかり日本晴に晴渡つた。午前七時頃から北海道を横斷し始めて、七時半には内

内浦灣
渡島廳振兩國に
包まれた噴火灣

Hand-
Kerchief
ハンケチ

駒ヶ岳
北海道渡島北部
の火山

浦灣に出た。北海道の陸地にさしかゝつた頃、その燈臺に日の丸の國旗を出して我々を歓迎してくれたのは、實に



號伯ンリベッエツ

嬉しかつた。處々の村落でも、村人たちが往來に出て、ハンケチを振つたり、旗を振つたりしてくれました。海の上に出

てからも、ずつと右手に北海道を眺めながら進んだ。八時半には遙かの彼方、右手に駒ヶ岳を眺めることが出来た。北海道を去つてからは、奥州の山河を右に見ながら進んだ。

空は全く晴渡り、美しい故國の山々が近く蜿蜒として連り、海上には又小さくも可愛らしい發動機船が躍つてゐる。乗客は、誰一人としてこの美しい日本を歎賞せぬものはな



士博一ナケッエ

かつた。エツケナー博士も、レマン船長も、心から嬉しさうであつた。

十二時四十五分頃、一臺の飛行機が我々を出迎へるために飛來し、暫く後について來た。次第に夏らしく暑くなつて來た。イゼリン君の如きは、はやアルパカの上着に着換へてゐる。そして「もう暑くなつたからね。」と得意になつてゐる。

Dr. Eckener
エツケナー博士

アルパカ
Alpaca
アルパカといふ
獣の毛をま
せて織つた布

北野君
大阪朝日新聞記者
北野喜内

太田
茨城縣久慈郡太田町

かれこれするうちに午後二時になつた。誰も落ちつかない、たゞはち切れさうな期待で東京の空に憧れてゐる。折柄樺太廳長官縣忍氏から、私と北野君とに宛て、
今回天空一周の壯舉を企てたるグラーフ、ツエツペリン號を日本帝國に於て最初に樺太の上空に迎ふるは、衷心歡喜に堪へず。全島民を代表して深甚なる敬意を表す。貴下並に乗組員各位の御健康を祝し、併せて絶大なる御成功を祈る。

といふ電報に接した。

午後三時三十五分には四臺の飛行機が来て、迎へてくれた。そのうちに本社機もやつて来た。三時三十六分には太田

牛久沼
茨城縣稻敷郡牛久沼の西部にある沼

ホール
カメラマン

藤吉少佐
海軍少佐藤吉直四郎
タイプライター
Typewriter

を通過した。人々は皆往來に出て、仰いで眺めてゐた。私は一生懸命で荷物を片づけた。その間にもう牛久沼に來た。時は四時に十五分前である。漸く荷物の支度をすました私は、ホールへ出た。見れば、カメラマンは相呼應しながら撮影に忙はしい。

さうかうするうちに、はや利根川だ。「もう何十分で東京か。」とイゼリン君が聞きに來る。そこへ藤吉少佐が飛んで來て、航空司令に電報を打つた。だから、タイプライターを打つてくれまいか。といふ。「今より東京横濱を廻り、六時より七時の間に着陸す。」といふ電報である。

グラーフ、ツエツペリン號は今や關東八州を眼下に見て東

谷中
上野公園の北方

モーター
Motor
發動機

廣小路

上野公園の前の大通

松坂屋

上野廣小路にある名高い百貨店

ドラモンド、ヘイ
イ
北米合衆國の婦人新聞記者

北米合衆國の婦人新聞記者

京に進みつゝある。四時十五分、谷中の方面から東京に入つた。先づ上野公園が見える。次いで博物館の青色や丹色の屋根が目に入る。美術館は想像よりも大きく見える。上野公園の西郷の銅像のあたりは非常な群衆だ。恐らく手を振りつゝ萬歳を叫んでゐるのであらう。モーターの音に妨げられて、その叫は聞かざるべくもないが、その熱狂の状だけは、それとうかゞはれる。廣小路に大きな建物が聳え立つてゐて、その屋根は満員客止といふ盛況だ。これはいはずも知れた松坂屋だ。やがて私はホールを去つて航空室に赴き、ドラモンド、ヘイ女史と並んで見おろす。女史はさも満足げに、いよく「参りましたね」といふ。

丸の内
宮城の東北に隣る一郭

品川
大森

東京市の南郊

總持寺

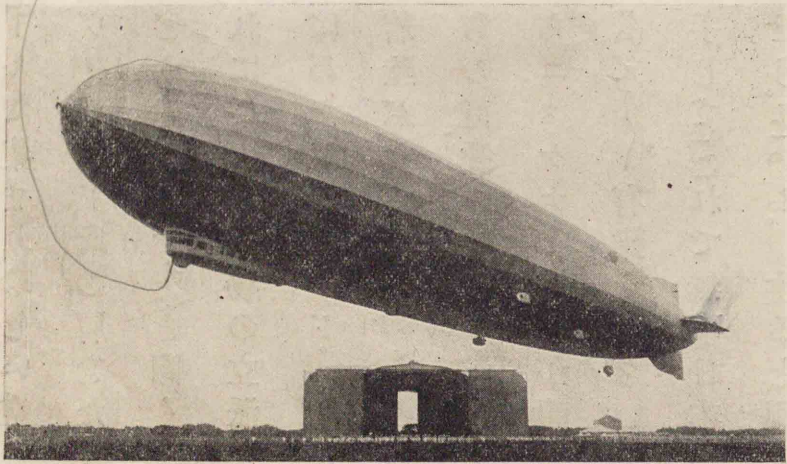
曹洞宗の本山

神奈川縣横浜市
鶴見區にある

今や我々は銀座通を左方に見つゝ東京驛の上にさしかゝつた。驛前から宮城前へかけての廣場は實に美しい。我は遙かに莊嚴な宮城を拜した。宮城の青錆びた屋根は、丸の内一帯の洋式建築と一種の對照をなして、またない眺である。わが東京日々新聞社の屋根にも、我が同僚が澤山集つてゐる。おゝわが友よ、故國の山河舊知に遠ざかつてゐる此の身は、今や空中から卿等に對面する機會を得て、懐かしさに堪へない。遙かに挨拶を送る。船はいつしか品川から大森へと飛んでゐる。鶴見の總持寺が見える。もう鶴見に來たのだ。東京から十分もたゝない。あちこち見まはしてゐるうちに、もう横濱だ。船が丁度港内の上空

を過ぎる時、汽船は一齊に汽笛を鳴らした。五時過ぎ横濱に來たわがグラーフ、ツエツペリン號は、再び東京へと同じ道を引返し、ひたすら霞ヶ浦へと急ぐのであつた。もう六時である。夕日影は曇れる空にその姿をかくして、黄昏のけはひは今しも野末をつまうとしてゐる。そら來た。霞ヶ浦に、格納庫の上に。六時三分だ。庫前の野原には、無数の見物人が集つて、しきりに手を振つてゐる。グラーフ、ツエツペリン號は更に霞ヶ浦を横ぎつて、一回轉して格納庫に向つた。カウダ博士は一生懸命にタイプライターを打つてゐる。着陸したらすぐ電報を打つために、その文案をたゞいてゐるのであらう。

ゴンドラ
飛行船についで
ある懸吊船
Gondola



格納庫とツエツペリン伯號

へい女史は輕快な洋服に着換へ、茶色のミツツエをかぶつてホールへ出て來た。「どうですか。」と降りかけると、につこりとして、「わたしは非常に幸福です。なぜつて再び好きな日本を見るのですもの。」といふ。午後七時近くなつて、グラーフ、ツエツペリン號がもう地上に着き、水兵たちがゴンドラを擔つてゐる時、我々乗客一同はホ

ールに集まり、珍しい空の模様を眺めてゐた。私はフォン、
 ヴィガンド氏の肩をたゝいて、「どうです、貴方は此の着陸を
 どう思ひますか。」と聞くと、氏は、「いや、全く驚歎しました。そ
 れにこの飛行場の立派な事は、まあ、どうでせう。」といふ。傍
 にゐたドラモンド・ヘイ女史も亦、「まあ、何といふすばらしい
 着陸ぶりでせう。あの若々しくて元氣のよい水兵さんた
 ちの可愛いこと。」といつてにつこりする。そこへ航空室か
 らエッケナー博士が顔を出した。私が博士の側へよつて、
 「いろく有難うございました。」と挨拶すると、博士は堅く握
 手して、「これで無事日本へ着いて、あなたも嘸御満足の事
 でせう。」といふ。すると、側にゐたミヒヤス博士やイゼリン君

が、圓地君は故國に歸つて來たのだから、さぞ嬉しいでせう。
 一番幸福なのは圓地君です。」と肩をたゝいてくれる。エ
 ッケナー博士も大きく笑つて、「はつく、圓地君は今日は神
 様と一緒にをるやうなものさ。」といつた。そして又航空室
 へとその姿を消した。 (東京日日新聞)

二〇 美しき球

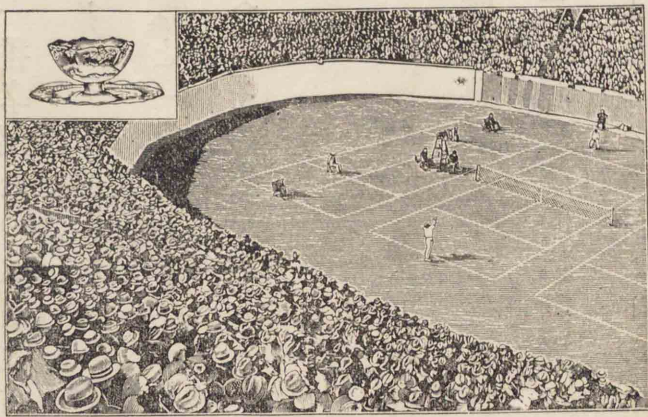
戦の幕は切つて落されました。こゝにニューヨークを距る
 二十哩、理想的運動場として有名なフォレストヒルの清
 らかなグラウンドの上には、白線が美しく浮いて、何となく
 純化されさうな氣分が漂うてゐます。米國の老幼男女は

戦の幕
 大正十年米國フ
 オレストヒル
 に於ける庭球デ
 ヴイスカップ戦
 我が清水選手と
 米國のチルデン
 選手との試合
 ニューヨーク
 米國東都の
 大都會
 New York
 フォレストヒ
 ル
 Eorest hill
 グラウンド
 Ground

ファン
運動競技の
熱狂的見物
人

清水君
名は善造
三井物産會社員
群馬縣箕輪町の
人

テニスコート
庭球場
Tennis-court



清水チンデル兩選手の手試合

勿論、世界各國のファンは、ひとばかりにグラウンドのまはりにつめかけて、この展開された場面に、兩選手の出場を待構へておりました。チンデル君の上に幸あれかしと祈る人の心と、清水君の上にと祈る人の心とが、平和の光の中に照り映えておりました。

この光の中に、この無聲の應援の中に、凜とした決意と慘憺たる苦衷とを想はせつゝ、微笑を浮べて、兩選手はテニスコー

トに現れました。身長五尺四寸五分の清水君が六尺二寸のチンデル君に向ふのですから、まるで子供が大人と試合をするやうであります。観覽席の人々は、異口同音に、「氣の毒だが清水君は駄目だらう」と囁きあつておりました。

火蓋は切られました。隙を窺ひ虚を衝く龍虎の争は愈始まりました。一秒一秒、チンデル君と清水君との球は牙えて來ました。觀覽者は球の動くがまゝに、その瞳を忙しさに動かしておりました。一心不亂に見入つた彼等の瞳に、傷はしや、チンデル君の片足迄らして取亂した姿が映りました。彼等は驚倒しました、躍起となりました。この時です、清水君がチンデル君の血走つた目元に、取亂した脚下に柔かい、

程のよい球を送つてやりましたのは。この瞬間に於ける清水君は、チンデル君に對する任侠の精神に燃えて、自己の優勝に對する名譽の感情も、自尊の精神も、全く打忘れてしまつたのでした。

「ミスター、シミヅ！」の歡呼の聲と共に、米人三萬の手は林の如く一齊に振上げられました。私は此の一刹那、あゝ清水君も清水君だが、米人も米人だ」と深く感じました。初めコートに出た時、チンデル君の眉宇には清水君に對する侮蔑の情があり、と見透かされたので、心ある米人は、その態度に少なからず不安の念を懷いてゐました。然るに、清水君は、出場早々、この冷たい侮蔑に報ゆるに、温情春の如

私
「スポーツマンの精神」の著者矢島鐘二

上州長脇差
昔上野國で長い脇差をさして往來した博徒の稱

上泉伊勢守
名は秀綱
劍道神陰流の開祖
上野國箕輪の人

き優しい球を以てしたのです。この親切は電氣のやうに米人の胸に響いて、彼等の心の底から感激を湧上らせたのであります。英人は、日英同盟の舊誼もあり、且は日本の應援者の少ない關係も手傳つてか、すつかり清水君最眞になつて、盛に同君に拍手を送りました。當時ニューヨークには群馬縣人が五十五人居りましたが、彼等は所謂上州長脇差の氣象から、此の日は總動員で應援に出かけました。これら敵味方總掛りの歡呼は、單なる清水君の妙技に發したのではなくて、その尊い任侠の精神に對する力強い感激に發したのであります。清水君と同郷の劍聖たる上泉伊勢守も、定めし、でかした、清水よ」と叫びつゝ、莞爾として笑を地

下に含んでゐる事でありませう。時は一瞬一分を争ふ場合であります。清水君が五・六・七・八の四個月にわたり、十二個國の選手を薙倒して最後の決勝に入つた時であります。若し今明二日間の米選手との競技に於て勝を制し得たならば、日本開闢以來のデヴィスカップを獲得する事の出来た時であります。この時に當り、チンデル君の失策に對して、同情に充ちてゐる優しい球をその手元に送つた清水君は、實に偉いと思ひます。清水君が、我は我にして我にあらず、實に神州男兒を背負つて立つてゐるのであるといふ事を自覺して取つた此の任侠の態度は、實に見上げたもので、敬服の外はありません。

デヴィスカップ
米國の富豪デヴィスが各國の選手の庭球競技に於ける優勝者に贈ることを例としてゐる大形精巧のカップ

人格の修養は大切であります。がしかし、いきなり釋迦や孔子の眞似をしようと思つても、私どもにはなかくむづかしい。私どもに取つて一番近路の修養法は、お互に親切同情を以て相接するといふ事であります。「武士は相見互」。その敵を愛せよ。などいふ語は、我々に取つて誠に尊い教訓であり、又永久の眞理であります。時代は如何に推移しませうとも、フォールレストヒルにおいて發揮された清水善造君のその敵に對する任侠の態度と、貴くも美しいその球の精華とは、蓋し世界庭球の歴史に特筆大書せられて、永久に燦然たる光輝を放つてあります。是れ獨り我が清水君の名譽たるのみならず、實に我が日本男兒の名譽であります。

す。(矢島鐘二著、スポーツマンの精神に據る)

萩野由之

國學者

文學博士

東京帝國大學名

譽教授

新潟縣相川町生

大正十二年歿

年六十四

保昌

丹波・大和・攝津

等の國守に歴任

した

長元九年(一〇六〇)

歿

年七十九

源頼信

滿仲の子

頼光の弟

鎮守府將軍に任

ぜられた

永承三年(一〇七〇)

歿

年八十一

二 保昌と袴垂

萩野由之

藤原保昌といふ人は大納言藤原元方の孫で、母は醍醐天皇の御孫であつた。だから身分も立派な人であるが、柄に似合はず力が強く、武藝に勝れて、源頼信等と同じく武勇を以て知られてゐた。當時の風習は、文官でも、武人でも、高尚な人は皆音樂の嗜があつた。中でも保昌は、殊に笛が上手であつた。

夜中は既に過ぎて、町々は皆寢靜まつた頃であつた。保昌は月の光の皎々たるまゝに、興に乗じて例の笛を取出し、これを吹きつゝ、家路に就いた。此の時の保昌の心には、笛の音が月と共に澄渡つて、その音律が自然に通ずるのを喜ぶほかに、は何物をも考へなかつたであらう。眼に入るものは、月と我との外には何物もなかつたであらう。まして、強盜がぬき足さし足で、背後から切りつけようなどとは、夢にも知らなかつた。

當時は警察制度の不備を爲に、京都の市中には強盜追剽の類が甚だ多かつた。中には隊を組んで人家に押入る者さへあつた。これらの輩の巨魁に袴垂といふ者があつた。そろゝ、夜寒になつたから、一かせぎして衣服を調達しよう、とある夜、ひそかに市中を鶺鴒の目鷹の目。折しも一人の

士が美しい衣服を着て、従者も連れず、唯一人、しかも夜半すぎに、笛を吹きながら徐行するのを見出した。「あゝ、よい掠鳥がかゝつた。これこそ着物を我にくれる爲に來たやうなものだ。」と喜んで尾行した。然るに、彼の士は一向知らぬ風で、依然として笛を吹きながら徐行する。少しも氣附いた様子がない。袴垂もさすがに不審に思つて、手出しもせず、そのまま十餘町ついて行つたが、やはり、かの士は笛を樂しみながら歩いて行く。袴垂は臆して手が出ない。袴垂が心を取直して、一思にと刀を抜いて走りかゝると、彼の士は始めて笛を止めて立止まつて、「何者だ。」と一喝した。さすがの袴垂も魂を失つたやうになつてもはや逃げも匿



大穂芳年寫

保昌と袴垂 (大穂芳年畫)

れも出來ぬと觀念したから、「私は追剝で袴垂といふ者でござる。」と答へた。その時彼の士は、「さやうな者がゐるとは聞いてゐた。さあ、おれについて來い。」と、また笛を吹きながら歩いて行つた。袴垂も、その態度應答の工合で非凡な人だわいと思ひ、鬼神にでも捉まつたやうに、畏る畏る隨行した。やがて大きな

賴光

源滿仲の子
東宮大進に任ぜられた
治安元年(六六〇)歿

貞道

村岡五郎貞道

季武

卜部六郎季武
秀國の子

治安二年(六六二)歿

源綱

渡邊綱

坂田金時

通稱主馬助

門のある家へ入つた。彼の士は再び出て來た。そして綿入の衣服を袴垂に取らせて、此の後、うつかりした事をして過ちすな。」と言含めて歸らせた。袴垂は生返つたやうな心地がして、その家を立去つた。この士が即ち保昌であつたのだ。

其の後袴垂が他の犯罪で捕縛された時、今までに恐しかつた事は唯一度ある、それは月夜に笛を吹いて通つた人をねらつた時であつた。」と物語つたといふ。

世に武將の四天王として、一に賴光、二に保昌、三に貞道、四に季武と數へるが、平貞道や平季武は源綱、坂田金時と共に賴光の部下の四天王で、保昌と肩を比べ得る人ではない。賴

市原野

又樺原野
京都府愛宕郡鞍馬の山口

松村武雄

文學者

神話學者

文學博士

東京帝國大學講

師

明治十八年熊本

市生

光は武將として保昌と匹敵するが、保昌のやうな優美の點が缺けてゐるやうに思はれる。賴光が市原野で鬼童丸を殺したのは、彼が武勇談の一つであるが、その時は綱や貞道が隨行したのであつた。のみならず、強盜一人を三人がかりで切殺したのである。

保昌が月下の笛に心を澄まして、袴垂が月の雲隠を伺ひつつ近寄つたの知らぬ態度の大きさは、また格別ではあるまいか。(史話と文話)

二二 ベッカストリニ

松村武雄

ベッカストリニ

Beccastrini

イタリー

Italy ヨーロッパ南部の王国

フロレンス

Florence イタリア中部の都會



ニリトスカッベ

歐洲戦争では各國の間に多くの勇士が現れた。イタリーのベッカストリニの如きは、そのうちでも最も花々しい勇士であつた。

ベッカストリニはイタリーのフロレンス附近の貧家に生れたものである。彼は歐洲戦争の始まるまでは、坑夫として炭坑に働いてゐた。しかし戦争が始まる二年前、一千九百十二年の秋に、ミランの工兵聯隊に入隊した。その時、彼は丁度二十歳であつた。

Milano ミラン
イタリア北部の都會

Austria オーストリア
澳大利
ヨーロッパ中部の共和國

彼の屬した工兵聯隊が派遣されたのは、敵國オーストリアの國境に近いパスビヨ山附近であつた。この山は峨々たる山にあつまり、樹木などは餘り生えてゐない禿山であつた。

彼の聯隊はこの山を隔て、オーストリアの敵軍と睨み合つてゐた。だから、戦闘はいつでも塹壕や坑道の中で行はれた。こゝは全山が岩から成立つてゐるので、塹壕を掘るにも、坑道を造るにも、大した骨折をしなければならなかつた。彼の聯隊は、たえず強い火薬を使つて、岩山を爆發させねばならなかつた。かくて彼の聯隊は、いつしか爆發隊といふ名で通るやうになつた。

ベツカストリニの前身は炭坑の坑夫である。だから彼は
 塹壕を掘るにも、坑道ガレージを造るにも、人一倍すばしこく、目ざま
 しい働をした。彼のさう
 したすばらしい働は、やが
 て上官の目に止まつた。
 一日ベツカストリニは上
 官の前に呼出された。彼
 は何事が起つたかと思つ
 て、心配しながら、不動の姿勢で上官の前に突立つた。上官
 は機嫌キゲンのよい顔をして、黙シヤウつて彼に一枚の紙を渡した。そ
 れはベツカストリニを少尉セウイに任ずるといふ辭令ジレイであつた。



帝 皇 - リ タ - イ

レコード
 Record
 記録

「お前の働は大したものだ。だから、皇帝陛下はお前を少
 尉に昇進シヨウジンさせて下さつたのだ。今後も益、働くがい。」
 上官は嚴ケンかな口調クテウで、かう言つた。ベツカストリニは夢の
 やうな心持がした。一兵卒が一足とびに將校シヤウキョウになるとい
 ふことは、これまでにないことであつた。イタリー陸軍は
 今までのレコードを破つて、一兵卒を少尉に任用しようとし
 したのであつた。
 ベツカストリニは本當に夢のやうな心持がした。彼は嬉
 しくてたまらなかつた。が、「しかし」と、ベツカストリニは考
 へ始めた。「自分は文盲モンマウである。手紙一本も碌ロクに書けぬ男
 である。自分のやうなものが將校の列に入るのは自分だ

けの恥ではない、イタリー陸軍の不名譽である。嬉しさのあまりに光榮あるイタリーの陸軍を汚してはならぬ。」ベッカストリニは、かう思つた。そこできつぱりした口調で、上官に、

「有難い仰せではありますが、私は御辭退申します。」

と言つた。上官は非常に驚いた。そして、ベッカストリニの顔を睨みつけるやうにして、

「なにつ、辭退する。それはまたどういふわけか。」

と詰つた。

ベッカストリニは、しづかに自分の考を話した。そして、自分が將校になつてもよいだけの素養のついた曉に、改めて

辭令をお受けすると言つた。上官は感に堪へないやうな顔をして、そのまゝ黙つてしまつた。

それからといふものは、ベッカストリニはもう死物狂であつた。彼はパスピヨ山の塹壕の中で、一生懸命に語學を勉強した。晝夜の別なく火藥を使つて岩山を爆發させたり、鶴嘴を擱んで地を掘つたりするのだから、身も心も打ちのめされたやうに勞れ果てるのであるが、ベッカストリニは氣を取直しては、戦のひまどにABCから稽古を始めた。世に熱心ほど恐しいものはない。手紙一本も碌に書けなかつたベッカストリニは、數年かゝらぬうちに、イタリーの文壇にもはやされるやうになつた。

二

ベッカストリニはたうとう隊長の代理として多くの兵士を指揮するやうな身分となつた。その頃のことである、ベッカストリニは、一日部下を呼んで烈しい爆發藥の調合を命じた。そして自分はその側において、仕事の監督をしてゐた。と、一人の兵士が、何を間違へたのか、くらくくと煮立つてゐる鍋の中にゼラチンを入れた。

Gelatine
ゼラチン

「あつ、しまつた。」

ベッカストリニは、かう叫んで、いきなり飛出した。そして大きな聲で、そこに群つてゐた部下に、

「逃げろく、大爆發だ。」

と叫んだ。部下の兵士たちは、弾かれたやうに、はつと飛退いた。

ベッカストリニは飛鳥のやうに身を躍らせて、鍋を掴むなり、谷底めがけて、どうと投落した。が、もう遅かつた。鍋はベッカストリニの手を離れた瞬間に、凄じい響を立て、爆發した。ベッカストリニは聲をも立て得ないで、地面にぶつ倒れた。あゝ、何といふ光景だ。彼の眼は二つともぐちやぐちやになつた。左の腕は肩の處から根こそぎ振ぎとられた。そして、右の手先はさゝらのやうに無慙に裂けて、からだはすつかり不具になつた。しかし大勢の部下は、彼の命がけの働によつて救はれたのであつた。

ベツカストリニは、思ひがけない不具者となつてしまつたので、除隊となつて癡兵院に收容された。癡兵院に入つても、ベツカストリニは決してむだに日を送ることはなかつた。彼はまづタイプライターを打つことを稽古し始めた。彼の左の手は肩から振ぎとられた。右の手先もぐぢやぐぢやになつて、やつと二本の指が残つてゐるだけである。彼はこの二本の指を使つて根氣よくタイプライターを叩いた。そして間もなく、ペンで書くよりも迅く且正確に書けるやうになつた。そして彼の名の署せられた立派な文章が、ぼつくと名高い雑誌や新聞に現れるやうになつた。「あゝ、ベツカストリニ。」

世人は彼の名を見ると、すぐにかう言つた。この簡単な言葉のうちには、ベツカストリニの赫々たる勳功に對する讚歎と、その不幸な運命に對する同情とが溢れてゐた。

三

一千九百十七年の五月、傷病兵に對する勳功表彰式がローマで行はれた。式は非常に盛大であつて、皇族を始め、内閣諸大臣が盡くこれに列席した。

言ふまでもなく、ベツカストリニはその花形であつた。數ある傷病者のうちでも、ベツカストリニほど勇敢に働き、ベツカストリニほどひどい傷を被つたものは少ない。彼は最も名譽ある勳功者の一人として、その日厚く表彰される

ことになつてゐた。
式は癡兵院の内で行はれた。院内はいろくくの準備でた
いそう込み合つてゐた。役員たちはみんな興奮しきつて、
紅い顔に眼を光らしながら、忙しくあちらこちらに走りま
はつてゐた。

ベッカストリニは式場に出るために、靜かに支度をした。
きちんと身じまひをすますと、「さあ、これで支度が出來た。」と
獨言をいつて、最後に靴をはくためにあたりをさぐつた。
しかし、靴は彼の手に觸れなかつた。彼は少しあわて、忙
しく手を働かした。それでもやはり靴は見つからなかつ
た。そのうちに式の時間はだんく迫つて來た。彼は氣

をいらつて、しきりに從卒の名を呼續けた。しかしどうし
たのか、從卒もなかくやつて來なかつた。ベッカストリ
ニは困つた顔をして、黙り込んだ。
と、廊下に少年の聲がして、

「君、何か御用ですか。」

といふ。ベッカストリニは聲のする方に見えぬ眼を向け
て、何氣なく、

「僕は靴を穿きたいのですが——。」

と言つた。すると、少年はつかくとベッカストリニの側
に歩み寄つた。そして、「では、僕が助けてあげませう。」と、まめ
まめしく靴をはかせた。そして紐を結びながら、「紐の加減

はどうです。これでいかゞです。」言つてゐるところに、大勢の人が通りかゝつた。人々は驚いて叫んだ。「殿下はこゝにいらつしやいましたか。」



子太皇 - リタイ

うであつたらう。やがて式が始つた。多くの傷病兵は熱意の籠つた表彰の辭と一緒に、いろ／＼な勳章を授けられ

あゝ、ベッカストリニの爲に靴の紐を結んだ少年こそ、イタリーの皇太子殿下であつたのである。それを知つた時のベッカストリニの驚愕と感激とは、ど

た。ベッカストリニは高級の勳章を授けられた。その勳章が枯木の枝のやうな彼の二本の指にかけられた時、さやさやと衣ずれの音がして、誰やら彼のそばに歩み寄つた。



后太皇タリゲルマ

意してくれた。ベッカストリニは電氣に撃たれたやうに、肅然として身を正した。皇太后陛下は靜かに仰せられた。

彼はそのしとやかな足音と、あたりの物々しい氣配とで、位高い女性がお出でになつたことを感じた。と、一人のものがマルゲリタ皇太后陛下であると注

「あなたの事はのこらず聞いてゐます。新聞や雑誌に發表される文章もみな読んでゐます。聞けば、その手で非常にうまくタイプライターを打たれるさうですが、今日晴の場所で打つて見せて下さいませんか。」

やがてタイプライターがベッカストリニの前に運ばれた。皇太后陛下はベッカストリニの後に立つて、その肩に片手をかけながら肩越しに紙面を覗きこんでゐられた。ベッカストリニは機械に二本の指をかけながら、暫く身動きもしなかつた。

「どんな文字が書かれるだらう。」

満場の人々はかう思つて、固唾を呑んで控へてゐた。寂と

して聲なき中に、ベッカストリニは興奮しつゝ、打つべき文句も容易に頭の中に浮んで來ないやうであつた。

見よ、二本の指は忽ち稻妻のやうに疾く動き出して、かつかつの音が續けざまに場内の空氣をふるはせた。人々は覺えず目を見はつた。見る間に、紙の上には、

「陛下よ、臣は陛下の殊恩に感泣す。」

といふ文字が現れた。打ちをはると、ベッカストリニの空洞のやうな兩の眼から、熱い涙がはらくとこぼれた。彼は黙々として涙に濡れた顔を紙の上に伏せた。すゝり泣きの聲がそこゝに起つた。(童話の研究)

高山樗牛
名は林次郎

評論家
文學博士
山形縣鶴岡市生
明治三十五年歿
年三十二

嘲風

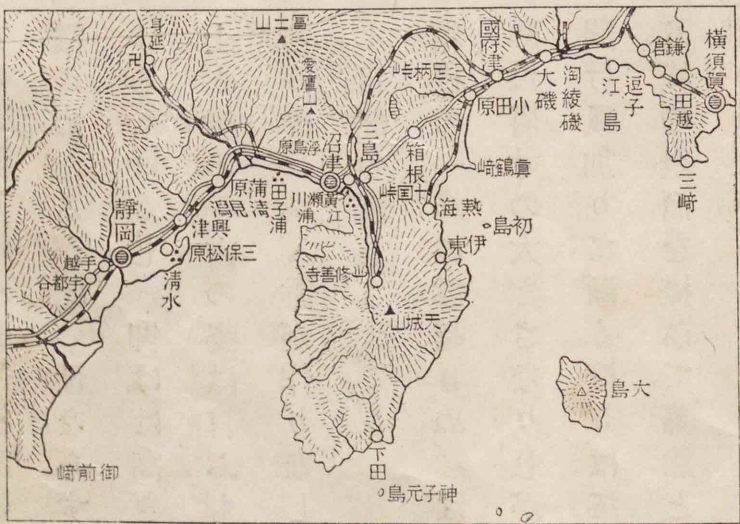
柳崎正治
宗教學者
文學博士
東京帝國大學教
授
明治六年京都府
生

二三 十國峠

高山樗牛

十國峠の登臨はこよなう壯快なる遊なりき。此の峠は、函嶺より天城に連る、所謂富士火山脈の一峰にて、嶺に上れば、關の東西より豆州の沖かけて、十國五島を眺め得べしとぞある日、空晴れわたりたるに、われ嘲風とこゝに遊びき。山の嶺は熱海より五十町を出でざれば、いたう高しとは言ひ難し。されど、相駿二州に跨りて、北は足柄箱根富士より、南は天城神子元島より、大島三宅島の山々を望み、西は江浦、靜浦を眼下に見おろし、名も高き田子浦づたひに、清見瀉より三保、松原かけて遙かに遠江なる御前崎に至るまで、東は眞鶴崎のあなた、小田原國府津、洵綾の磯邊に沿うて、江島鎌

倉の山々より、田越三崎のはてに至るまで相模灘を包みて、かすかに安房上總の遠巒を望む。景物の壯大比ふべきものなし。殊に美はしきは、江浦より清水に至るまでの田子浦の景色なり。富士の裾野を縫へる小松原の濃き緑なるが、蒲原興津わたり淡き紫にうすれゆけるさま、



十國峠附近



十國峠から見た富士

て西の方にたなびきぬ。

愛鷹あしたかの峰にかゝるころ、富士嵐に

霞こめたるが、此の世ならず見ゆるもゆかし。仰げば高き富士が嶺の千古の姿は言ふもおろかや。あゝ誰が作りなしけん自然の麗しさよ。箱根の一峰に雲起りぬ。はじめは膚寸の大ききなりしが、谷開け、風加りて、漸く擴り、はては八峰の全面を掩ひて、驀然とし

逆らひたるにや雲行忽ち天に向ひて、二山の間、白雲の壁を築けり。其の頂、山風に散じて、滿天を覆ひ、濛々として咫尺を辨へず。我、衣襟をあはせて凝眸すること多時。嘲風杖を揮つて天を劃し、快哉を絶叫すること三たび。少時にして空霽れて、函嶺の崔嵬、富嶽の清容、もとの如し。滿天の雲霧、その何處にゆきたるかを知らざりき。(樗牛全集)

二四 山の歡喜

河井醉茗

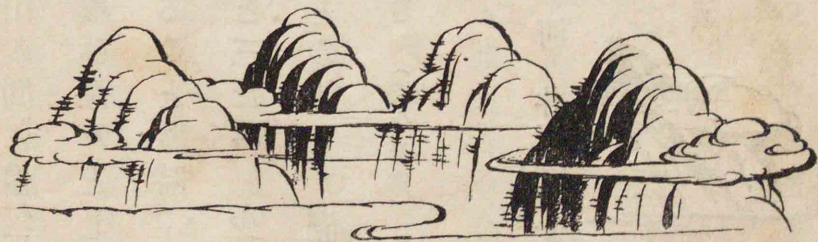
あらゆる山が喜んでゐる。
あらゆる山が語つてゐる。
あらゆる山が足ぶみをして、



河井醉茗
名は又平
詩人
明治七年大阪府堺市生

山

舞ふ躍る。
 あちむく山と、
 こちむく山と、
 合つたり、
 離れたり、
 出てくる山と、
 かくれる山と、
 低くなつたり、
 高くなつたり、
 家族のやうに親しい山と、
 他人のやうに疎い山と、



遠くなり、
 近くなり、
 あらゆる山が
 山の日に歡喜し、
 山の愛にうなづき、
 今や
 山のかゞやきは、
 空いつばいにひろがつてゐる。



(明治大正詩選)

大類伸
 歴史家
 文學博士
 東北帝國大學教
 授
 明治十七年東京
 市生

二五 水の都

ヴェニスは伊太利の有名な都市であつて、風景の美を以て

大類伸

ゆきあり
やあつと
からもの
くもの
ふて

ヴェニス Venice
ポ ー
の 伊太利北部
の 川
東流してア
ドリア海に
入る
Rialto リヤルト

世界に喧傳された水の都である。此の都は北伊太利の沿岸で、ポーの河口に近い地點にある。街は大きな潟の内にある島であつて、陸とは全く離れて居り、又海に向つては長く斗出した海峡によつて限られて居る。陸からも海からも攻めにくい要塞地で、潟の内は安全な一箇の城郭の様なものだ。街は其の潟の中央なるリヤルトの島に置かれてゐる。中世の始め、幾多の蠻族が伊太利を荒した時、人民の或者は逃れて此の險要な潟に據つて、こゝで漁業を營むことになつた。これがヴェニスの草分けである。此の地は軍事上險要な地であつたばかりでなく、其の潟は少なからぬ漁鹽の利を藏してゐた。ヴェニス



の住民がおひく發達した其の資源は、此等の利に依つて得たものである。それのみでなく、歐洲内地と東方諸國との交通の要路に當つてゐたので、遂には中世第一の商業市といはれるばかりの盛況を呈するに至つた。ヴェニスの發達は全く水の賜である。水あればこそ陸からも攻められずに安全な

生活を營むことが出来、水あればこそ漁鹽の利を收めることが出来、水あればこそ更に四方に航海通商を試みる事が出来たのだ。その美しい風景も、また全く水の賜に外ならぬ。

Gondola	ゴンドラ	Malamocco	マラモッコ	Venus	ヴェナス
有の半月形の舟	ヴェニス特有の半月形の舟			ローマ神話の中にある女神	

此の如くして、ヴェニスは全く水から生れたやうなものだ。ヴェナスの女神は水に浮ぶ泡から生れたが、ヴェニスの都も亦それに似たものといへよう。初め都は海に面した洲崎の一端なるマラモッコにあつたが、後に潟の中央なるリヤルトの島に移つたのである。今は此の島全體が都となつて、其の間を縦横に多數の運河が通じてゐる。そして人は此の水の通りをゴンドラと呼ぶ古風な小船に乗つて



ス ニ エ ヴ

往來する。

多くの人家は直ちに水に臨んでゐるから、戸口の石段は水に洗はれ、ゴンドラの船は直ちに此の戸口に着けることが出来る。他の都市では、けたまほしい自動車の警笛や、敷石を軋る轍の音で喧しいのに、ヴェニスでは、水を分けゆく静かな櫂の音が聞かれるばかりだ。文明の進歩した今日、かくの如き都市は、實に世界に稀なものといつてよい。

あゝ水に浮ぶヴェニスの都寺院に宮殿に其の榮華を語る大廈高樓が、色さまざまの大理石に時代の古びを見せて、一灣の水畫の静けさに眠る上に、蜃氣樓と見紛ふばかり浮び出る時、或は夕日に赤く彩られた眞帆片帆の滑かなる水面

カマビニスしり

アドリヤ海
 伊太利半島の東にある海
 Adriatic Sea
 小亞細亞
 亞細亞土耳其の一部
 Asia Minor
 シリヤ
 亞細亞の西部地中海沿岸の地方
 Syria
 埃及
 亞弗利加東部の國
 Egypt

をたゆたふ時、或は又遠く銀波の靡けるが如く、瀉の彼方を限る洲崎の間を分けて漁船の歸り來る時、若しくは月靜かなる夜ゴンドラの船歌面白く、水に映る街の燈火を櫂の先にかき亂して行く時、水に浮ぶヴェニスたひんの都の美しさは如何に遊子の心を動かすであらう。朝の霞にも、夕の霧にも、春夏秋冬、ヴェニスの美は即ち水の美に外ならぬ。併しヴェニスたひんが水に負ふところは、たゞに其の美觀のみではない。ヴェニスは實に水の爲に立派な海港となることが出来たのだ。即ちその住民は、水を利用してアドリヤ海から遠く東に航し、小亞細亞、シリヤ、埃及の沿岸にも通商貿易を試みた。従つてアドリヤ海はヴェニスの爲には貴重

なものであつて、これがなければあの様な發達は到底望まれないであらう。さればこそ當のヴェニス人は、アドリヤ海をヴェニス市の夫と見たたのである。都を妻とし、海を夫とする、何と美しい想像ではないか。ヴェニスが繁榮を極めた時代には、以上の想像に基づいて、茲に昔床しい儀式が行はれた。それはヴェニスの町とアドリヤ海との結婚式である。それは市民が行ふ儀式の中で最も莊嚴華麗なもので、毎年一回づつ行はれた。此の日ヴェニスの長官は自ら花を飾つた政府の大船に坐乗し、後には多數の貴族の船を従へ、美々しい行列をつくつて悠々と海上に漕出した。かくて長官はヴェニス市を代表して黄金の花環

を海上に投じ、アドリヤ海と千年の契を籠めたのであつた。夫アドリヤ海と妻ヴェニス。一は人間の作つたもの、一は自然そのもの。自然なるその夫は朝夕の潮の満干に洲崎の岸を洗ひ、リヤルトの島をおとづれて、千秋萬古何のかりもないけれど、人爲の妻はその容姿が日に月に衰へて、今はその誇も榮華も一向に認められない。思うて此に至れば、誰しも多少の感慨なきを得ぬであらう。

(ヴェニスとフロレンス)

徳富健次郎

號は蘆花

文學者

明治元年熊本縣

水俣町生

昭和二年歿

年六十

二六 月の天橋

徳富健次郎

ぎいと艚が響いて、舟は墨染の濃い松影のところから、白々

とした月下の海に出た。海といつても浅い洲の水である。何といふ好い月夜か。雲一つ無い空にのみ照るかと思へば、水中に天あつて、其處にも月は璧の如く光つてゐる。何といふ清い水だらう。月明りにも、水底の砂が分明に數へられる。

此處は橋立明神の渡か。若しくは銀河をいま渡つてゐるのではあるまいか。船頭よ、ゆるやかに舟をやつてくれ。もつと徐かにやつてくれ。しかし、如何程徐かに舟をやつても、彼岸は近い。するくくと舟はもう天橋の渚に着いてしまつた。

舟からあがつて踏む白砂は、もう天橋立である。此處らは

Pin ^{ピン} pin
This is a pin

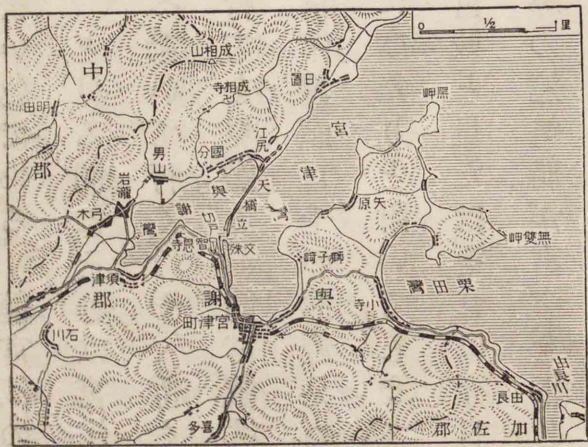
植ゑついで間もないと見え松は若松で疎らである。月光に雪と輝く砂を踏んで段々奥へ入つて往く。歩むに連れて松影は段々深くなり果ては月の光よりも松の影が多くなつた。

何といふ明るい月だらう。仰げば松の一葉々々が白金のピンを敷ふる如く讀まれ俯く砂にはまた一葉々々の影が黒く鮮かに讀まれる。

松の間の路の曲る處に來た。余は松の幹に倚つて立つた。ひつそりした天橋立に人籟絶えて唯何處からともなくざあざあといふ響がする。松風か。否、足下の松影は濃い墨もて描いた様に少しも動かぬ。音響は與謝の海が天橋一

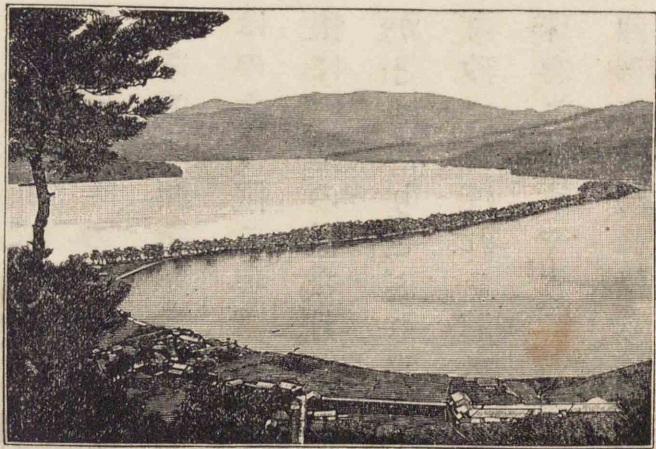
Ruby ^{ルビー}

里の白砂を舐める響に外ならぬのである。其の響に惹かれて汀に出て見る。其の處に二間ばかりの花崗石のベンチがある。腰をかける。月下にほの白く眠る與謝の海。其の懷には璧の様な月を抱き寐息かとばかりざぶり又ざぶり。白砂にこぼれる漣はまるで眞珠をこぼすやう。海の南に半圓形に山根に沿うて紅寶石や琥珀の光が點々と灣を縁どつてゐるのが宮津の町である。



天橋立附近

ふと此方の海の上に不思議なものが現れた。晃々とした



行くのであつた。あとは唯慰したやうな與謝の海。照り

明珠の幾段にも並んだ老大な
横長い物である。龍宮城の出
現。と見る間に、それは宮津の
方へ動いて行く。やゝ暫く其
の行方を見送る。龍宮城は彼
の宮津灣頭百千の龍燈晃めく
邊にぴたりと附いてしまつた。
龍宮城と見たは、それは今日の
最終の連絡船が宮津を指して

天 橋 立

まさる月の空と靜かに相見て相抱き、一里の松原枝も鳴ら
さぬ天の橋立の長い汀に沿うて、ざぶり又ざぶりと漣がさ
さやくばかりである。

汀から松原に戻つて、奥へくと砂路を歩む。さくくと
砂を踏む足音の絶間に、波のさゝやきが慕うて来る。幽か
に蟲の音がする。松影は益深くなつて、はては砂の上にこ
ぼれる月影がちらくちらと螢ほどに細く疎らになつた。と
見ると、こゝにひつそりと鎮ります社がある。大方橋立明
神といふのであらう。松影を浴びた其の宮に人影もない、
人聲もない。燈明一つ點つてゐない。余は其處の松に倚
りかゝつて、やゝ久しく立つた。

大分經つて、松影のところから外に出て歸途に就いた。砂路を又ぶらりくと切戸の渡に來た。切戸の水は全く銀河の如く美しい。汀に立つて向ふを見れば、眞黒い彼岸に唯一つ赤い燈が見える。文殊の渡守の小舎の燈である。
「おうい〜。」

渡を呼ぶ余の聲が震へて銀河を渡る前、余は月の天橋の端に立つて、暫く其の燈を眺めてゐた。(死の蔭に)

二七 物思ふ夜

櫻井忠温

櫻井忠温
陸軍歩兵大佐
明治十三年愛媛
縣松山市生

月が庭の松の樹の上に寂しく光を投げてゐる。もう夜も大分更けた。坂向ふの家の灯もおほかた消えて

めい
ン
ア
シ
ン

乃木大將
名は希典
陸軍大將
伯爵
大正元年九月十
三日明治天皇御
大葬の當日殉死
した
年六十四



乃木大將

しまった。ところどころに夜を守る街燈の火がまたゝいて
ある。犬がどこかで吠えてゐる。

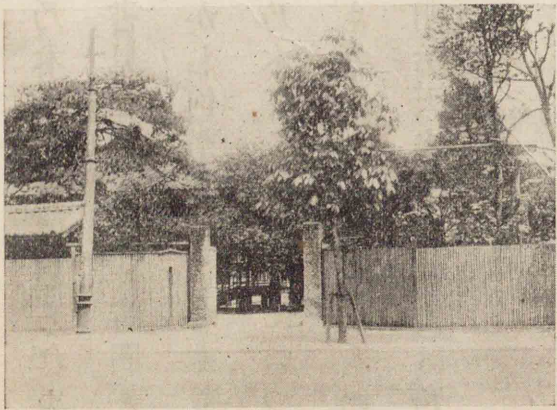
屋根瓦が月をあびて、きら〜
光つてゐる。
庭樹のかげに、黒いものが立つ
て、動きもしないでゐる。

に落ちてゐる。
「黒いもの」の肩に、月光がまだら
しばらくすると、月が「黒いもの」をばつと照した。そこに乃
木大將の顔が浮び出た。

乃木さんは、今宵も部屋を出て、庭さきを歩いた。そして樹の下に佇んで、月に眺め入った。そして、乃木さんは、静かに歩き出した。そして、下り坂になつた庭を下つて行つた。むくくと茂つた、低い庭樹の間を縫ひながら。

カーテン
Curtain

乃木さんは、十歩もあるくと立止つた。そして静かにふりむいて家の方を見た。乃木さんの部屋の灯が、カーテンをまれて臙に光つてゐる。乃木さんは、深い息をついた。何かしら黒い鳥が、きれいに鳴きながら、頭の上を過ぎて行つた。五分も過ぎると、月は白い雲の中にかくれた。あたりが絹



乃木大將邸

を張つたやうに薄暗くなつていつた。そして、街頭の火が眼をさましたやうにはつきりと浮び出た。

やがて乃木さんは踵をかへし、もとの道に引きかへし、坂を登つた。そして、家の方へ歩いていつた。

ときどき立止つては深い息をついたのであつた。

廐の方でことごとくといふ音が

した。

乃木さんは窓下を歩きながら、廐の方へ歩いていつた。

静子夫人
乃木大將夫人
大正元年九月十
三日その夫に殉
死した
年五十四

淡月を浴びて静かに眠つてゐる愛馬の姿が目に入った。
乃木さんは、このごろ、かうして深夜に庭を歩く日が續いた。
乃木さんには眠られぬ日が多かつた。
書見をしても、一時間とは續かなかつた。煙草をふかしふ
かし、何か考へ込むやうな時があつた。
乃木さんの部屋にいつまでも灯がともつてゐるのを、馬丁
も女中もよく見たものであつた。
明治天皇崩御の後は、乃木さんはもう一口もきかなくなつ
た。
寂しい家が一層寂しく、めいるやうになつた。
静子夫人とも餘り口をきかなかつた。

哀しい日
乃木大將夫妻殉
死の日

食事も、いつもの半分しか口にしなくなつた。
水をとりによせて飲むやうな時がよくあつた。
そして、衰へが日にくく加はるやうに思はれた。
さうしてゐる内に、哀しい日がだんく近づいて來た。
(將軍乃木)

笠井信一
當時の巖手縣知
事
貴族院議員
靜岡縣生
昭和四年歿
年六十五
先月
大正二年一月

二八 明治天皇の御遺物 笠井信一

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰出さ
れましたので、例刻に參内致しましたところが、十一時すぎ
特別の思召によつて、權殿參拜を許されました。權殿と申
すは、崩御の後、一年間皇靈を祭らせられる宮中の御室でこ

ございます。

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁



明治天皇尊像 (渡邊長男作)

遊ばされる處でございませぬ。先帝には長く茲に在らせられて、徳教を御敷きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられる等、
宏謨雄圖一にこの中で御定め遊ばされたのでございます。

然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外で、平常私共が參内の節、休息を許される御部屋の方が却て遙かに御立派である。餘り廣くない二間續きの御部屋で、檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も御椅子も實に御質素なものです。絨毯の如きは最初敷かれた儘ですから、後には色も大分褪めて参りました。それで、侍臣から御取換の儀を屢願ひ出しましたが、御許がなくて、遂に今日に至つたのださうでございます。此の御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。その御部屋には、先帝が御學問所に於て御使用になつた御遺物の全部が其の儘に据置かれてございます。これ

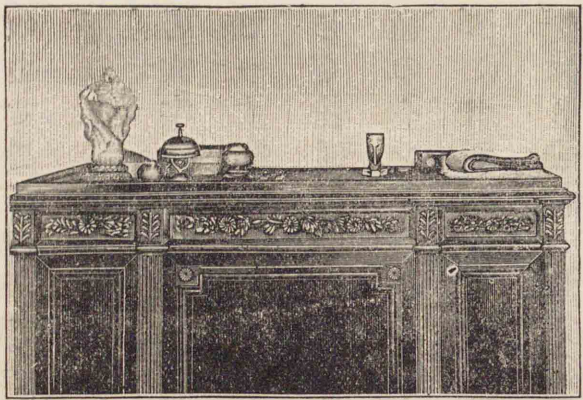
今上天皇
大正天皇

は今上天皇陛下の大御心に出でさせられたる趣に拜承致
しました。構造も方向も廣さも御學問所と全く同一であ
つて、すべての御遺物も昨年七月十三日即ち先帝最後の出
御當時の儘に御備附になつてございました。床の間には
其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には御劍が數振
横たはり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世
の折は、我等如き者が御机に接近するなどは思ひも寄ら
ぬこととございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜
觀する光榮を得ました。

Table
テーブル

まづ御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に焼痕がご
ざいます。是は先帝が御煙草を召上つていらつしやつた

とき、臣下より政務の言上がありました。先帝には御吸ひ



(藏殿物寶宮神治明)

かけの御煙草をテーブルの上の
御或物に横たへて、御熱心に御聴取
あらせられた折煙草が墜ちて此
机の焼痕がつくやうになつたのだ
と申すこととございます。さて

此の焼痕のあるテーブルの羅紗
を御取換へ申し上げんがため、侍
臣より幾度となく願ひ出ました
けれども、斷じて御許がなかつたとの御事。蓋し何物でも
それにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉徳

の至と拜察し奉ります。御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣から御取寄になつた竹製の品でございます。そのなかの筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物とかはらないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに御使ひふるしに成り、墨も亦同様で、一寸位に磨りへらされた品でございます。缺も亦同じく普通市場にある品で、其の傍に學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍従の方が何かの調べに用ひた儘、其處に置忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと思つて、今更ながら御儉徳の高きに感激し、自ら顧みて慙愧に堪へなかつ

た次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷かれてございます。これは青山御所において遊ばされた頃から久しく御使用になつたもので、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れるやうになりました。そこで侍臣より御取換を願ひ出しましたが、なにごれでよい。と仰せられて御許がない。せめて御修理を願ひ出て、漸く御許を得た。併し適當の皮がないことを言上致しました處、何の皮でもよいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申すことで、侍従が此の邊が犬の皮でございます。と説明して居られました。

其の傍にホワイトシャツを入れる白いボール箱やうのも

ホワイトシャツ
White shirt
ボール
Board

のが澤山に積重ねてございましたから、何に遊ばす物か。」と侍従に尋ねました處、やはりシャツの空箱であるが書類を入れるに便利であるとして、御手許に留置かせられたものであるとのことでした。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れて、表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は別の紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は一枚たりとも御棄て遊ばさず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して御歌所に御廻し申したのださうでございます。實に天下の物は、用ひるに其の途を以てす

よけをさけぬるなをやくし

米英日米月英



ば一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は務めて御節約相成り、些かにも冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。

ごんかのちのたか 一天萬乗の大君におはしまし

ながら、禿びたる御筆を御用ひになり、破れたる敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか。皆是、節すべきを節して有用の事にのみ御用ひ遊ばすといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

4 5
偕御次の間には、造花や彫刻や種々な物品が備へられてございしました。之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御獎勵の爲御持歸り、又は御買上げにならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に、造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪めはて、殆ど裝飾の用を爲さぬものまで其の儘になつてございします。その他美術工藝品の如きも、皆御獎勵のため、俗人の好みとは全く趣を異にしていらせられます。御製に、

千よろづの民と偕にも^{モツ}樂しむに
ます樂みはあらじとぞ思ふ。

とございしますが、實にこのやうな御樂みを求めさせられんが爲、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございします。

今や我が國運は先帝の長き御心づくしの御蔭を以て隆々として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば、我等は長い間、聖天子御一人に非常な御苦勞をお掛け申し上げましたのでございします。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に

國のためいよく勵め千よろづの
たみもこゝろを一つにはして。

の御製をも同時に服膺して、公人としても私人としても力

のあらんかぎりを盡し、以て「我が日の本のかため」のため應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございます。(巖手縣學事彙報)

昭和十一年一月水曜日の四時

中國文教科書 卷一終

中國文教科書 卷一

昭	大	大	大	明	明	明	明	明	明	明
正	正	正	正	治	治	治	治	治	治	治
和	和	和	和	四	四	四	四	四	四	四
五	元	元	元	十	十	十	十	十	十	十
年	年	年	年	五	五	五	五	五	五	五
一	二	二	二	十	十	十	十	十	十	十
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
十	三	三	三	八	八	八	八	八	八	八
三	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
日	修	修	修	正	正	正	正	正	正	正
修	正	正	正	八	七	六	五	四	三	再
正	版	版	版	版	版	版	版	版	版	再
十	行	行	行	行	行	行	行	行	行	再
九	發	發	發	發	發	發	發	發	發	再
版	發	發	發	發	發	發	發	發	發	再
版	行	行	行	行	行	行	行	行	行	再
發	行	行	行	行	行	行	行	行	行	再
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	再
印	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大
刷	和	正	正	正	正	正	正	正	正	正
行	四	五	四	五	四	五	四	五	四	五
正	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
十	九	二	十	一	一	一	一	一	一	一
九	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
版	二	十	十	十	十	十	十	十	十	十
發	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
行	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
	修	修	修	修	修	修	修	修	修	修
	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
	八	七	六	五	四	三	再	再	再	再
	版	版	版	版	版	版	版	版	版	再
	發	發	發	發	發	發	發	發	發	再
	行	行	行	行	行	行	行	行	行	再

定	價	昭和五年度臨時定價
卷三、五	金四十八錢	金七十八錢
卷一、四	金四十七錢	金七十七錢
卷二、六、八	金四十六錢	金七十五錢
卷九、十	金四十四錢	金七十二錢



編者	吉田彌平
發行者	上原才一郎
印刷者	山崎與吉
發行所	光風館書店

東京市神田區通神保町六番地
東京市神田區通神保町六番地
東京市神田區通神保町六番地

電話 神田三〇八七番
振替口座東京三二七番

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御申越被下候はゞ直ちに御送附可致候

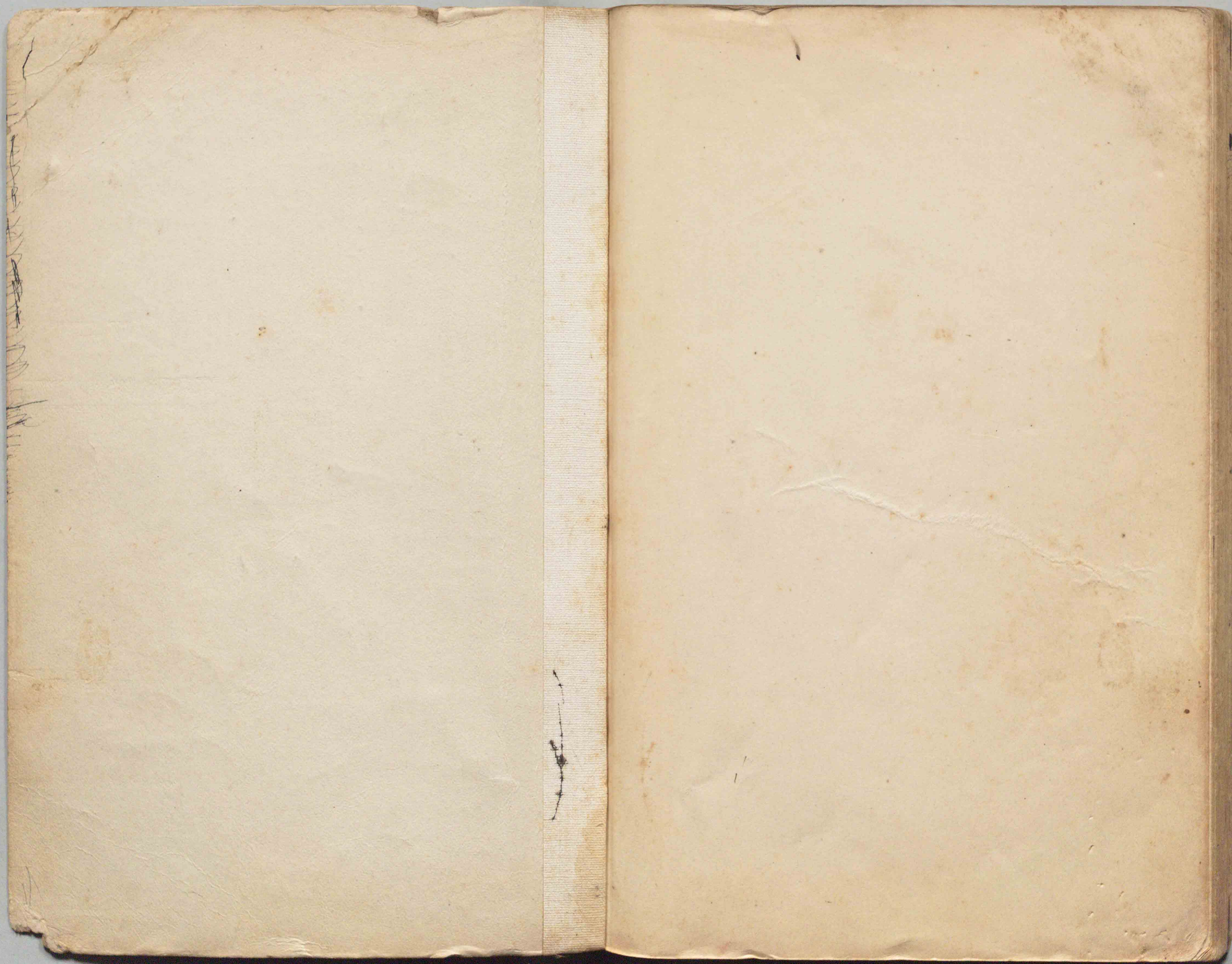
Table of numbers and characters, possibly a calendar or index. Includes vertical columns of numbers and small Chinese characters.

Small table with multiple columns and rows, containing numbers and characters. It appears to be a continuation of the data on the right page.



Large vertical columns of Chinese characters, likely a list or index of names, locations, or items.

A long, narrow column of vertical Chinese text on the far right edge of the page.





第一卷
第一号
下巻

庫
0
99

広島大学図書
2000301999
